

522

176



始



522-176



の
夢

坪内逍遙

譯

13. 3. 29

購求

縮言

「眞夏の夜の夢」に關する、最も古き最も確實なる記録として屢、引用せらるゝフランシス・ミーヤスの著「バラデイス・タミヤ」(智慧の庫)中の記事は下の如し。

彼のプロダスとセネカとが羅甸人中に在りて其最善の喜劇作家、悲劇作家と考へらるゝが如く、シエクスピヤは英國人中に在りて兩種の劇に最も秀でたり。喜劇に關しては、彼れの「エローナの二士」、「錯誤」、「戀の空骨折」、「戀の骨折效」、「眞夏の夜の夢」及び「エニスの商人」を見よ。悲劇に關

しては、彼れの「リチャード二世」、「リチャード三世」、「ヘンリ四世」、「ジョン王」、「タイマス・アンドロニカス」及び「ロミオとジュリエット」を見よ。

ミーヤスの此著の登録せられしは一五九八年なれば、「真夏の夜の夢」が同年以前に公にせられをりし事だけは確實なり。されどミーヤスが此著を脱稿せしは、或は其登記よりも餘程前なりしやも圖りがたければ、「真夏の夜の夢」の創作時は單に此記事のみにては知るべからず。随つて之に對する學者らの見解は區々なるが、早くとも一五九〇年よりは早かるまじく、晚くとも一五九八年よりは晚かるまじくと假定せらる。それには各、多少の論據あり。

或者は此作に暗示せられたる歴史的事蹟によりて、又或者は其想脈乃至詞致によりて、又或者は此作の特質より推して、其成れる動機を或結婚式の一餘興を供するに在りしならんと做し、それによりて創作年月を推定せんとせり。婚儀用論者にも數派ありて、一は其時期を作者が第一の保護者たりしサウサムプトン伯爵とエリザベス・ブーノン姫との結婚の際（一五九八年）と做し、二はエリザベス女皇の寵臣エセックス伯とシドニー未亡人との結婚の時（一五九〇年）と做す。或は更に他の貴族の結婚を以て之に擬せんとする論者もあり。要するに、いづれも臆測たるに過ぎ

す。さもあれ、此作が、其初め何等かの際の慶事用にとて著想もしくは著筆せられし事は、其三組までも新婚者を作中に取り入れ、音楽舞踊を豊かに利用し、或部分は假面劇式に綴り、又或部分は、當時反假面劇と稱せられたりし我間狂言式の滑稽劇趣味を以て潤色し、専ら陽氣に、賑かに、しかもめでたい、くに終局するやうに結構せられたるに著明なり。とはいへ、現今傳はれるものは、疑ふらくは、一氣に書下されたる原始の稿本にはあらずして、其刊本となりしまでに、若干の年所と幾多内容の變化とを経たる第二の稿本にはあらざる歟。沙翁學者らが口を揃へて

稱讚せる如く、此作は明かに沙翁集中の最も微妙にして且つ最も飄逸なる一種特別の空想劇には相違なく、又其幾部分は作者が圓熟後の筆ならではと思はるゝ程に巧妙なれども、尙處々落想若しくは詞致に、其習作時代の面影を留めて、他の精妙なる部分とは別人の筆に成れるが如き幼稚にして粗笨なる部分も尠からず。此不自然なる矛盾は、其著筆に前後の二期あるにあらざるやを疑はしむ。蓋し其内容より推すときは、此作は作者の青年期に屬すべきものたるは略明かなり。作意の如何にも陽氣にして、處々子供げともいふべき程に無邪氣に若々し

く、作者みづからも浮かれ樂めるが如く思はるゝ書振は、彼れが第一期(習作期)の喜劇たることを立證して餘りあり。加ふるに、此作中に夥しく取入れられたる妖精フェアリーに関する俗信及び傳説乃至山野林泉の景象などは、作者が其故郷ストラットフォードに在りし頃の幼き耳目に深く感銘せし印象の尙餘りに隔たらざる追憶らしくもあり、又シ、ヤス、ヒポリタ、カドマス、ハーキュリス等、希臘英傑の名を物珍らしげに綴り入れたるなども、初めて古典文學に親しみし頃の所感らしくもあり、かたゞ(米の沙翁學者ホワイトの既に言へる如く)少くとも其腹案だけは青年期に成りたる

ものと見るが當然ならん歟。さすれば前にいへる矛盾はおのづから釋然たらん。とにかく劇作家としての技倆の未だ圓熟せざりし頃の作なるが如し。何となれば、空想詩としては古今有數の絶品なれども、實演すべき劇としては成功せるものとは見做しがたければなり、餘りに夢幻的に飄逸なれば、到底之を讀める時の豫期相當に上演せんこと不可能なればなり。それこれを併せ考ふれば、此作の初筆は一五九四年頭よりは晩からざるものゝ如し。

其刊本となりて世に布かれしは一六〇〇年が最初なり。

フィッシャー版と稱する四折本とロバート版と稱する四折と二種あり、共に同年の刊行なり。次に後者に依據して成れる第一二折本あり、例の作者死後出版の全集中のものは是れなり。現今行はるゝ本文中に見るが如き場割は後人の加筆にして、四折本にも二折本にも無し。幕を分ちしすら二折本が初めなり。

「テムベスト」の材源の釋ねがたきが如く、此作の據りどころも追跡しがたし。從來沙翁學者らの舉示せるチョーサーの「勳爵士の譚」、スペンサーの「仙女王」、ブルタークの「英雄列傳」、オ

ギッドの「變化物語」などは、たかゞ幾分かの暗示を供して趣向の緒を得しめしに過ぎざらん。脚色の上にも、詞藻の上にも、想脈にも、それらの諸作に負へる跡は幾ど見えす。妖精に關する英の民間迷信を前例無き程豊かに取り入るゝと同時に、全曲を夏の夜の一夢と思惟し得らるゝやうに仕組み、之を讀み又は觀了りたる者をして同じく夢心地の尙覺めざるが如き感あらしむる此作意は、——沙翁以前は夢物語及び夢に托したる作の最も多く行はれし時代ながら——前に其例を見出だす能はず。按ふに、悉く是れ作者が空想裡より捻出せるものなるべし。

此作の題名 (*Midsommer-Night's Dream*) は沙翁學者間に種々の疑問を生せしめたり。本譯には故と從來の慣稱と音調の美とを重んじて「真夏の夜の夢」と譯したれど、直譯すれば、或は「夏至の夜の夢」ともすべきならん、英に所謂「ミドサムマ」は六月廿一日にして我夏至に相當すればなり。然れども「ミドサムマース・ナイト」は之を英の中夏節 (*Midsommer-Day*) の前夜又は當夜の義とも解し得べし。中夏節とは英國にては彼の聖ジョン浸禮者の祭日にして、毎年六月廿四日之を行ふ。六月廿一日の夏至とはおのづから別なり。作

者の意は其何れなるべき歟。ドクトル・ジョンソンは曰く「沙翁は何故に之を『中夏の夜の夢』と表題したるか知るべからず、彼れは此作の事件は五朔節(五月一日の例祭)の前夜に起れる由を特に注意して讀者に告げをればなり」と。ドクトル・フアーマーは曰く「此題名と作中の事件とは何の相關する所もあらず、猶『冬の物語』中の事件が羊毛刈の季節に起れりとして寫されたるが如し」と。而してマロンは、「此表題は、彼の『冬の物語』が冬の夜の興を添へん爲に上演せられしと同じく、其初めて興行せられし時機に因めるに過ぎざらん」といへり。

或は中夏の夜といふことを最廣義に解して曰ふ、夏は兎角人の心の逆上して狂妄に流れ易き時にて、「盛夏的狂妄」(土用きちがひ)といふ諺もある程なれば、こは只作意の甚しく荒唐にして盛夏の夜の空想たるにふさはしとの意を暗示せるに過ぎざるべしと。此最後の解は當を得たるに幾し。フアーネスは曰く「英國語の繼承者に取りては、中夏節ミッドサマーデーの前夜に妖精らが戯あはれ狂るといふことは古來の民間信念によりて熟知せられたる事にてもあり、題名其者に一種の魅力具はりて、讀む者の心に、一も二もなく、當夜に關するあらゆる迷想を受け納れしむ」と。要する

に、夏の眞盛りの夜などに見さうなる夢に似たる劇といふ意味に軽く見るが却つて最も穩かなる解なるべし。

夢を名に負へる此劇は、興味も價值も其夢幻的なる所にありて、心理的、論理的なる所にあらず。故に性格描寫は取立て、言ふべき程の事なし。曲中に現はるゝ人物は、おのづから三類を成せり。一は古代希臘の上流社會の一群にして、二は其下等社會、三は英國にて妖精フェアリーと稱する魑魅罔兩の一群なり。第一群は戀愛に原因せる衝突葛藤、超自然力の干涉に由る錯誤爭論及び和解の、多少眞面

目なる「間、遠だらけの喜劇」を形成し、第二群は田舎、芝居、忠臣蔵式の樂屋と舞臺面とより成れる自然の滑稽劇を提供し、第三群は此兩群の間に介在し、活動し、妖精王と其使魔のバックとは所謂狂言廻しの役を勤めて、此一種無類なる夢幻劇を脚色し來る。事は五朔節の四日前に發端して、是等三様の人物事件が並存し、纏綿し、交錯し、發展し、竟に五朔節の早朝に至りて結局す。現實境の何時となく夢幻境に浸沈し行くを、讀みて幾ど意識せざる所に、眞に夢見つゝあるが如き感興を覺ゆ。同じく夢幻劇といふと雖も、「テムベスト」などは全く別様の興趣あるなり。同

一人の作者が斯く相類せる材料を用ひて作しながら、二種の全く相異なる名篇を成せると最も驚歎すべしと做す。沙翁の作に寫されたる希臘、羅馬の風俗は、他の一層眞面目なる史劇に於てすら、徳川時代の戯曲小説に現はれたる鎌倉時代、足利時代のそれに似寄りたるものなるが、此作の如きは、もとより夢幻劇として作られたるなれば、時代錯誤は更に甚し。アセンス市には王はありしが、公爵の在るべき筈なく、まして英國宮庭の特設官たる宴樂部長などのあるべき筈なし。朝野の習俗、山林の景物、いづれ

も明白に英國式なるが、就中希臘の神祇傳と中古の妖精譚とを勝手放題に取り合せたるは(當時の劇の常習とは言ひながら)我淨瑠璃などに見ゆる神佛混交、古今雜糅以上の行き方なり。随つてアセンス公爵も其貴族も貴婦人も平民も、之を風儀、言動の上より看れば、悉く英國當代の人物にして、幾分の誇張を割引すれば、エリザベス王朝に於けるロンドン市の上流と下流との風俗畫なりといふも不可なし。殊に、武骨なる職工らが催す素人芝居の稽古及び實演、並に之を觀つゝ戲評する上流社會の態度口吻は、之を此喜劇の爲に假作せられたるものとして見んよりは、

寧ろ此作書カキモノ下し當時の一のカリカチュアとして見るべきものならん。かゝる餘興式のものならぬ興行物の劇場に於てすら、時の貴族らは、舞臺上に席を占めて、劇中の人物(俳優)と相接近し、煙草を喫しつゝ、或は物を食ひつゝ見物する習ひなりしなり。職工らの自然の滑稽と貴族らの戲謔評とが、我洒落本シヤレホンの文句、黃表紙の書入れを聯想せしめて、エリザベス朝初期の文學と我徳川期の文學との間に幾縷かの繫絡あるを想はしむるも奇なり。即ち劇を觀るシ、ヤスらは、取りも直さず時の上流觀客の面影にして、職工らの演ずる劇は沙翁出世以前の民間劇のボンチ畫

なり、拙劣なる當時の劇に對する沙翁が式亭三馬式の嘲諷なり。要するに、此「眞夏の夜の夢」の中に現るゝ人物は悉く皆英國人、其四圍の景象は悉く皆英國の自然、といふうちにも、作者が故郷ストラットフォード邊の自然及び生活、山野、林泉、習俗、傳説、迷信等を齣毎に白毎に想起せしむべき劇なれば、之を讀むにも、之を演ずるにも、中古の英國といふ目安を忘るべきにあらじ。此點より觀て、最近上演のグランギル・バーカーが新意匠に成れる「眞夏の夜の夢」は、其舞臺面の寫眞及び其記事によりて察するに、作者の原意には遠く、作の内容にも情調にも副はざるものなり。之

を佳しとする者は、恐らく其珍しきを喜べるものか、然らざれば深くは原作を味はざる徒なるべし。

妖精に關する英國の民間信仰及び傳説を斯くの如く豊富に詩中に取り入れたる作は、沙翁以前に其例なき由は前にもいへるが、先輩既に説けるが如く、沙翁は此作に於て、脚色の都合上、特に一新案を立て、中古の傳奇に見えたる妖精類と村落の話柄たる小魔類とを故と混同して利用せんと企てたるものゝ如し。妖精は本來は必しも微小體格のものにあらざるに、本曲に現るゝ所のものは

蝶蜂などと同じき程の大きいものらしく、其點は村落の迷信に係る小魔エルフと一致す。又其歌舞を好む點、清潔を愛する點、其小兒を盗み去る癖ある點などに於ても小魔エルフと一致す。但し一別郷を天外いづこかに構へて、妖精群より成れる一社會を組織し、雄王オペロン、雌王チテーニヤを戴ける點は妖精系に屬す。朝廷めきたるものもありて、武官シグナリもあるらしく、此點はエドモンド・スペンサーが「仙女王物語」の趣あり。是等の妖精群は、夜々林泉山野の間に來往し、接遅し、優遊し、或は歌唱し、或は輪踊ワゴリを行ふ。雌王チテーニヤの得意の寢亭は千草チヂクの花の撩亂として自然の臥床を

なし、自然の天蓋をなせる處なり。彼等は其體格の微小なると同時に、事を行ふに迅速なるらしく、一瞬間の三分の一の間だけ舞ひ踊るなどいふとあり。雄王オペロンの幫間役を勤むるバックといふ小魔は、四十分間にして地球の周邊に帶をさせ得べしと高言す。此バックは作者が最も心を用ひて寫し出だしたるものにて、性格としては何等心理的興味あるにあらざれども、斯種シホ夢幻劇の一人物としては、古今に有數の製作なり。沙翁は此小魔の參考料マテリアルを同時代のお伽冊子「ロビン・グッドフェロー」のをかしき惡戯イタズラ物語ストーリーより得來りたるらしく、本來は同一物にあらざるバック

クとロビンとを混合させて此一性格を作り做せり。譯者が曾て雜誌「バック」の爲に綴れる戯稿は、バックとロビンの關係及び此作に現れたるバックの性質を略説明し得たるものなれば、こゝに掲ぐ。

バック君の自叙傳

僕の履歴を話せてのですか？ 此滑稽雜誌で、履歴調査なんか、野暮くたいぢやないかね？ え、是非とも話せ？ 何ですって、まづ名前の由來から話せって？ さア、バックは正にバックですよ、本誌が年來代表し來つてゐる通りの悪戯者たるに外ならんですよ。語原は伊太利語だったので、アイスランド語にも日耳曼語にも愛蘭語にも何處の語にも類似のがあつて、どれも意味は「小悪魔」ですので、早い話が化茶目ですが、一寸哲學臭く言やア超自然の悪太郎ですア。一步進んでニイ

チエの「超人」て奴を適用すりや、須らく超茶目公かね。だから僕は畫に畫かれりや、大抵翼の生えたドリケンよろしくといふ風だし、劇へ出りや、メフィストの曾孫てつたやうな面附に化粧れまさア。

僕は異名や綽號にや随分富んでますぜ。まづ、本名のバックの外に、「ロビン・グッドフェロー」(ロビン小僧)ね。それから、僕の面構から格好がお粗末だからつて、「ホブゴフリン」ね、醜様な小悪魔てことさ。それから「提灯太郎」又は「ウィル・ウィス・ア・ウィス」なぞとも呼ばれまさア。其理由は後で話しますがね。

今話した「ロビン小僧」てのは、實は、元は、僕とは全然縁も由縁もない別の小悪魔だつたんですよ。ところが、今から三百年ばかり前に、英吉利の沙翁て作者めが、「眞夏の夜の夢」て變妙來な劇を書いてね、其中で、如何いふ料簡だか、ロビンと僕とを一しよくたにして書いてしまやアがつたんで、それからものは、僕と奴とが同じ化物にされつちまつて、奴も僕も少くとも其存在の半分がたを零にしつちまつたんです。ロビンも僕も化けることは得手な方だが、沙翁めには參つちまつた、あいつめ化けさ

せるにも事を缺いて、二正を一正に縮めやがるんだもの。かうなると、人間の方が一枚上手の茶目公でさ。

其ロビン小僧てのはね、ソレアノ日本の三輪の神さまとやらのやうに、ある雄の妖精が、ある人間の娘に通つてさうして生じた小僧なんです、だから妖精と人間との雑種なんだ。小僧め五歳六歳の頃から大の茶目で、近所界限の鼻つまみであつた。で、流石に甘い母親もとう／＼近所合壁の苦情が耐へきれなくなつて、厳しく折檻しようとする、奴め忽ち家を飛出し、それから廣く世間を敵手に、行く先々で、勝手放題の超茶目修行をおツばじめた。おまけに、夢の中で、誰からともなく、何にでも變形自在の通力だか妖術だかを授かつたので、奴いよく、好い氣になつて、悪戯心を増長させて、小鳥に化ける、馬に化ける、美しい娘に化ける、大鳥に化ける、幽霊に化ける。但し、善人を窘めたり苦めたりすることは、妖術の授け主から堅く禁制せられてゐたもんだから、正直者や善く稼ぐ女房や素直な好い娘や浮氣でない情人同志などには、何か知ら手助けをしてやるか利益を與へるかするとも、決して害はしなかつたが、根

性曲りだとか、剛愎者だとか、多淫老爺だとかは、必ずロビンの爲に散々な酷い目にあはされるのが定りだつたのです。それに奴め、一寸聲が美しいので、何かといふと、自慢で歌を唱ふ。農家で、一寸目鼻のばりとした若い娘が忙しさに糸でも紬いでゐると、奴め忽ち隱形の術を使つて、そつと入り込んで、黙つて、さつさと娘の仕事を手傳つてやる。で、十二時間か、らなきや出来ない筈の仕事が、たつた六時間で出来てしまふ。だから翌朝起きて見て、娘は目を圓くする。かういふ場合に、娘が其禮に奴の好きな牛乳とクリームとを何かに盛つて出しといてやれば奴御機嫌だが、さうでないといふ腹を立てて「もう來ねえぞ、もう手傳はねえぞ」といふ意味の歌を唱つて定つて其結末に、「ホ、、、、！」と高笑ひをして、何處へか飛んでいつてしまふ。折々は、丑三頃に箒を擔いで「煙突のお掃除はいかゞでござい！」と呼んで歩く。本當の掃除人だと思つて、誰か呼止めると、「ホ、、、、！」と高笑ひをして消えてしまふ。かと思ふと、乞食の真似もする。で、人が何か與れようとする、「ホ、、、、！」だ。或はまた、夜中に人の家の戸口へ來て、コツ／＼と叩くから、「何だ」とい

つて、權助が手燭を持つて顔を出すと、フツとそれを吹消してしまふ。が、若し年の若いお三が出れば、火を消す途端に唐突に強く接吻しておいて「ホ、、、、、！」の失跡だ。これが僕の半身のロビン小僧です。

僕自身も、随分の濁泊悪魔なんだ。僕は、如何いふ譯だか生れ附清潔癖だもんだから、すべて穢いものを目の敵にしたものです。きたならしい小犬を半殺しに見たり、だらしない家だと見ると、入り込んでいつて、引掻き廻して家財道具をあつちこつちへ置換へたりなんかして、尙と其家の内を混雑にした。けれども身清潔にしてゐる小娘なんかには、そつと向うの知らんうちに、靴の中や衣袋の中や水盤なぞの中へ入れて、銀だの、寶石だの、其他いろんな玩具を與れてやつた。だが、僕の悪戯も、ロビン小僧と二身一體となつてからは、無論更にまた發展して、沙翁の奴が、あの「眞夏の夜の夢」に書いてゐる通り、村の女房達が骨を折つて搾つて置いた

乳汁の上皮を抄つて取つてしまつたり、とんでもない眞夜中は石臼をころ／＼いはせたり、牛酪を製しようとて、汗水流してゐる村の嬖の邪魔をして、徒に息を切らせたり、(肝腎の癖

母を摘み出して) 手製酒の醗酵を止めて見たり、(妙な火光を見せて) 夜行く人を路に迷はせて見たり

したものだ、
或はまた、牡馬めが十分物を食つて、發情り切つてゐる時分には、僕は牡馬に化けたものだ、さうして牡馬に氣を揉ませるために、わざと妙に腰を摺り附けたり何かして、ヒン／＼と鳴き立てた、すると、妖精仲間の王さんでさへ、可笑しがつて腹を抱へて笑つたものだ。

又時によつちやア焼林檎に化けて、饒舌婆さんの麥酒の椀の中に隠れてゐて、婆さんがそれを飲まうとすると、唇頭まで跳上つて、萎びた胸の垂肉の上へ其麥酒をぶつかけてくれたこともある。又は仔細らしい面附の村の小母が、或大眞面目な話をすると、うつかり僕を小さい腰掛と取違へてどっこいしよと太尻を載けようとする、と僕がひよいと脱ける、婆さん、頭顛倒と引くりかへつて、「どッ畜生め！」と怒鳴りやアがる、コン／＼と咳込みやアがる、一同が腹を抱へて、笑ふやら、面白がるやら、鼻をシユ

「いはいはせて、わしら會ぞ今まで如是をかしいこと見たことはねえなんぞと言はアね。」

つい今、妙な火光を見せて、人を路に迷はせると言つたツケが、只迷はせるばかりぢやねえんだ。そいつが遺恨のある野郎か何かでありやア、青みどろの張つてゐる溝池か小便溜かへ誘き入れて、首ツたけ陥込ませて、あぶくやらせて苦しませることもある。まア日本でいや、お狐さんの悪戯の格だ。さういやア、も、んがアの三つ目入道、酒屋の御用の一つ目小僧、腹鼓の音楽家、戸をトン／＼の狸どんも、僕とは異姓の兄弟らしいよ。けれども一等善く僕に似てるのは、殊に九州邊で昔から評判の河童君だよ。僕は其中に、柳田石神さんか誰かに紹介して貰つて、河太郎君と交際を結んで、互ひの履歴や血統を話し合つて見たいと思つてゐる。或は先祖は全く同一の化物かも知れないよ。僕の履歴の大體はまアさつと如是もんだね。

終りに臨んで、エヘン、僕圖らずも日本國に渡つて、本誌同人諸君の知遇を辱うし、現下眞に旭日の盛威ある大日本帝國の政治上、社會上、家庭上の諷刺役を委任されま

したてことは、化茶目としては頗る光榮に存じます。是れ一に讀者諸君の後援の大いなるに因ること、考へますから、こゝに謹んで諸君に感謝します、ナンカンと一寸人間並の艶辭をいつて見たものさ。はいちやい!

此作に關していふべき事は尙多くあり。第二幕第一場なる妖精王オペロンがバックに物語れる「尼姫君云々」の一節は、ニコラス・ローが沙翁集編成の當年より早く既に疑問の端を發きて、おひくゝに種々の複雑なる解釋を生せしめたり。其文脈より推して彼の一節に幾らかの隱微あるは認め得べく、又其要旨のエリザベス女皇に對する推讃辭たることは争ふべからずと雖も、或解釋家らの穿鑿せる

が如き煩瑣なる寓意談たるべきや否や頗る疑はし。管々しければこゝには論せず。其他、作中處々に暗示せられ若しくは引合に出だされたる英國民間の諸習俗、例へば五朔節の儀式の事、五朔竿の事、聖ヴレンタイン祭に於ける縁結びの事、九人戯あそびの事、迷路メイプの事、草の輪の事、取換子の事などは、一々註せざれば解せらるまじき事柄なれども、それらは總べて註釋書の領分に屬せしむべきものとして省きつ。

原作の詞は、作者が初期の作なるが故に、二には多少樂劇

趣味を取入れて綴られたる作なる故に、後の諸作よりも押韻せる部分多く、然らざる部分も極めて流麗に、快暢に、おのづからなる音樂をなすやうに綴られたり。而して、我國文に準へていへば、或は七五、或は八六、或は五五といふが如き風に、人物と場合とによりて、屢詞の節調を變化するに力めたるを、例によりて大抵口語體に譯したれば、傳へ得たる所は概して詞意のみ。又職工らの原詞は、其演劇に關するもの、外は、當時の談話語に幾らかの訛語をまじへて綴りてあり。按ふに、アセンスの市民とはあれども、作者の意は、暗にストラットフォード邊の素人芝居を聯想

せしむるに在りしものゝ如く、現にオペロンをして「アセンス
の田舎男」云々と言はしめをれり。而して彼等の魯鈍と
質撲と生真面目とは、自然の滑稽を作す所以なれば、故と
多く田舎言葉をまじへて其語を譯し置けり。

大正四年十月初旬

譯者 識

登場人名

シ、ヤス、 アセンス市の公爵。
イージヤス、 アセンス市の貴族にしてハーミヤの父。
ライサントー
デメトリヤス、 ハーミヤに戀慕せる青年紳士。
フィロストレート、 シ、ヤスに仕ふる宴樂部長。
クインス、 大工。
スナッグ、 指物師。

登場人名

ポトム、織屋。

フルート、風櫃屋。

スナウト、鍛冶屋。

スターゼリング、裁縫師。

ヒポリタ、シ、ヤスに許嫁せる女丈夫國の女君。

ハーミヤ、イージャスの女にしてライサンダーと相愛せる娘。

ヘレナ、デメトリヤスに戀慕せる娘。

オベロン、妖精群の雄王。

チテーニヤ、妖精群の雌王。

バック、又の名ロビン・グッドフェロー、いたづら者の一妖精。

豆の花

蜘蛛の巣

蛾 小妖精。

芥子の實

雄王及び雌王に侍する他の妖精ら。シ、ヤス及びヒポリタの侍者ら。

場所 アセンス市及び其附近の森林。



第一幕 第一場



眞夏の夜の夢

第一幕

第一場 アセンス。 シ、ヤス公爵の館

アセンス市の君シ、ヤス、女丈夫
國の女君ヒポリタ、宴樂部長フ
イロストレット及び侍者ら出て
来る。

シ、ヤ 喃ヒポリタどの、わしらの結婚の日は最早

間もない。嬉しい日が四日経てば、新しい月が来る。あゝ、しかし、此古い月めは、どうやら虧けるのが緩いやうだ。生きぬ仲の母親や後室が、萎びるまで遺産を若い者に譲り惜むやうに、待ちかねてゐる心を焦せをる。四つの晝は最早直に夜の暗に沈み、四つの夜は最早直に夢と過ぎて、やがて大空に、新に引絞つた銀の弓のやうな月が出て、わたしら二人の祝典の夜を照しませう。

ヒポリ

シ、ヤ

やい、フィロストレート、汝往つて、アセンス全市の若い者共を浮き立たせ、陽氣な、快活な、面白をかしい心持にならせて来い。陰氣や憂鬱は葬式の方へ廻せ、蒼白た顔色は華かな祝典には不似合なものだ。……

フィロストレート 入る。

ヒポリタどの、わしは此劍で卿さんを口説いて、大分酷い目に逢はせて諾と言はせたのだが、結婚式はそれとは調子を變へて、華美に、立派に、愉快に、

賑かに行らうと思ふ。

老臣 イーシヤス、其女、ハーミヤ、其情人、ライサンダー、及びライサンダーの競争者、デメトリヤス、出て来る。

イーシ

御機嫌よういらせられませ、シ、ヤス公殿下。

シ、ヤ

ありがたう、イーシヤス。何ぞ變つた事が出来たか？

イーシ

心外千萬な儀がござりまして参上いたしました、我兒、ハーミヤめに關する

お訴訟でござります。……お出なさい、デメトリヤス。(デメトリヤス進む。) 御前、此男は豫て我兒と結婚すべき承諾を私から得てをります。……お出なさい、ライサンダー。(ライサンダー進む。) ところが、此男が我兒の心をば惑しをつたのでござります。……卿は、ライサンダー、卿は彼女に戀歌を遣つたり、記念品を交換したり、月夜に窓の下で、切なげに假作へた戀の小唄を假聲で歌つたり何かした、それから卿の頭髮で製へた腕飾りだの、指輪だの、

一寸した思ひ附の裝飾品だの、小器用に出来た玩具だの、花束だの、菓子だの、純樸な若い者には強い誘惑になるものを贈つて、いつの間にか彼女が胸に深い印形を捺してしまつた。卿は奸智を以て子の女の心を盗んで、温順であつた者を我儘な剛情者にしてしまひをつた。……で、申し上げます、若し兒めが御前におきましても、尙このデメトリヤスとの結婚を承諾しませんやうならば、何卒アセンス古來の特權をお許し下されませ、我兒でござります以上は、此男に遣しますとも、死刑に處しますとも、此場合に恰ど適當した國法に順ひまして、私が處分いたします。

シ、ヤ ハーミヤよ、卿は如何答へる？ よく考へて返辭をしなさい。阿父さんは卿の爲には神も同様だ、其美しい容貌を造作へてくれた人だ。いや、卿は、阿父さんの手で捺されて蠟の上へ形を現す人型たるに過ぎないのだから、今在る形を保存しよう、臺なしにしよう、それは阿父さんの心のまゝ

だ。……デメトリヤスは立派な男だ。

ハーミ ライサンダーさんとても立派でございます。

シ、ヤ なるほど、個人としてはだ。が、此事の關係上からいふと、阿父さんの承諾を得てゐないから、デメトリヤスの方が優等だと言はんければならん。

ハーミ 父が、妾の目で、つい見てくれたらばと存じます。

シ、ヤ それよりも卿の目に阿父さんの分別を持たせるが當然だ。

ハーミ 失禮をお寛恕下さいませ。妾は如何して斯う大膽になつたのやら、又斯ういふ場處で思ふ通りの事をいつては女の謹慎に背くのやら、存じませんけれど、申します、若し妾がデメトリヤスとの結婚を辭みましたら、つまり如何いふ御罰を受けるのでございませるか、どうぞおつしやつて下さいませ。

シ、ヤ 命を亡するか、で無ければ世間との交際を絶つのだ。だから、ハーミヤよ、よく自分の嫩若い心に問うて、若し父御の望通りにしない時は、一生尼に

なつて、墨の衣を被て、永久に薄暗い菴室に閉籠つて、つれない冷かな月を敵手に、讚美歌を細々と歌つて、空しく尼で終らんければならんが、さうした辛抱が出来るか出来んか、血の氣の多い若い情によく訊ねて見るが可い。情に克つて、淨い處女で一生の廻國を終る輩は、如何にも尊い幸福な人達である、が、下界の幸福からいふと、假令いかほど安樂であらうとも、獨りで生長し、獨りで生死して、空しく荆棘の枝で凋んでしまふそれよりも、摘取られて蒸溜罐を懸けられる花薔薇の方が幸福だ。

ハミ

御前、妾は寧ろ其荆棘のやうに、獨りツきりで生き、獨りツきりで死にたうございます、好ましくもない鞭を掛けられて、心服してゐるぬ人を夫と崇め、處女の特權を其人に引渡さうとは思ひません。

シヤ

時間を費けてよく考へて見るが可い。次の新月を日限に……わしら二人が共白髪の契りを結ぶことになつてゐる其日を日限に……父御の意志に

背いた科で死ぬ覺悟をするか、或はダイヤモンド神の壇前で獨身不犯の誓を立てるか、いづれともよく考へて定めるが可い。

デメト

ハミヤさん、心を取直して下さい。……ライサンダー、君の要求は僕の權利の確實なのに比べると、まるで破綻だらけなのだから、放棄しておしまひなさい。

ライサ

デメトリヤス、君は彼女の親父さんに可愛がられてゐるのだから、娘の方は僕に任せといて、君は親父さんと夫婦になつたらよからう。

イージ

人を馬鹿にする男だ！なるほど、わしはあの男を可愛がつてゐる。可愛がつてゐるから予の物は何でもかでもあの男に遣る。ところで我兒は予の物だ。だから彼女に關する予の一切の權利はあの男に譲るのだ。

ライサ

御前、私は血統も身代もあの男に劣る所はございません。愛情に至つてはあの男以上でございます。私の福運は、デメトリヤスに比べて優つてゐる

と申さないまでも、悉く匹敵してゐるのでございます。それに、何よりも第一に誇りと致しをりますことは、ハーミヤに愛せられてゐることとございます。それゆゑ私は結婚を要求する権利があると存じます。デメトリヤスは……彼れの面前で断言しますが……曾てネダールの女ヘレナに戀をしかけ、悉く其情を得ました。可憐しいヘレナは、此男を斯様な汚はしい薄情者とは知らず、眞實誠心を傾け、神を崇めるやうにして溺愛してをります。

シ・ヤ 予も實は其事を聞いてゐたので、とうに其事でデメトリヤスと相談しようと思つてゐたのだが、我事にかまけて忘れてゐた。……が、デメトリヤスもイージヤスも彼方へ来てくれ、卿たち二人に内々言ひきかせることがある。……卿は、ハーミヤよ、よく考へて見て阿父さんに順ふやうにするが可い。で無いと、アセンスの國法で……予の力でも決して輕めることの出來ん國

法で……死刑に處せられるか、一生不犯の誓をするかせねばならんぞ。……さ、ヒポリタどの。どうかしましたかい？……デメトリヤスもイージヤスも、さアさア奥へ。此回の結婚式に就いて吩咐ける用向もあるし、又卿たちの身に關したことで話したいこともある。イージ 喜んでお伴をいたします。

ライサンダーとハーミヤとの他は皆入る。

ライサ どうしたんです？ 何故そんな蒼い顔をしてゐるのです？ 頬の薔薇が如何して然う急に萎れてしまつたのです。

ハーミ 雨が降らないからでせう。降らせたい大雨をジツと堪へて目に溜めてゐるからでせう。

ライサ 嗚呼々々！ 書を読んでも、話や歴史で聞いたところでも、眞實の戀といふものは、決して都合よく行つたことはいらない。或ひは、互ひの身分が

異つてゐるからとか……

ハトミ あゝ、情ないこと！ 身分の高い者が身分の低過る者を慕ふなんて！

ライサ 或は、年齢が違ひ過ぎるとか……

ハトミ あゝ、みじめなこと！ 年を取過ぎてゐて若い人と關係するなんて！

ライサ 或は、親兄の指圖を待たなければならんとか……

ハトミ あゝ、辛いこと！ 他人の目で戀人を選ぶなんて！

ライサ 或は、假令何もかもよく釣合つてゐたとしても、戦争とか死とか病氣とか

いふものに襲はれて、聲や影のやうに忽ちに、又は夢のやうに瞬間に消え

てしまふ。石炭のやうな夜の闇を破つて、ぱつと天地を見せたかと思ふと、

あれ！といふ間もなく暗黒に呑まれる電光のやうに、華かな物は悉皆めち

やく／＼になつてしまふ。

ハトミ 若し眞實の戀は、昔から不幸であつたのなら、それは止むを得ない宿命で

あらうから、辛抱するより外に爲様はない、定例つてゐる不幸なんだもの。心配や夢や歎息や願や涙とおなじに、戀の附物なんだもの。

ライサ 成るほど然うです。だから、ハトミヤさん、お聴きなさい。わたしに未亡

人の伯母がある、大身代の女主人公のだが、子が無いのでわたしを一人息

子のやうに可愛がつてくれる。伯母の家はアセンスからは九里ほどです。

ハトミヤさん、あそこでなら結婚が出来る、厳しいアセンスの法律だつて

彼處まで追掛けて來ることは出来ない。だから、わたしを愛してゐるのな

ら、明日の晩邸を脱出して來て下さい。市から一里半の……あのそれ何時

か五月祭をするとして、ヘレナと一しよに貴女に逢つたらう……あの杜の中

で待つてませう。

ハトミ ライサンダーさん！ わたし誓つてよ、キュービッドさんの最も強い弓と最

ち上等の金の鏃の矢に懸けて、ギナスさんの彼の無邪氣な鳩に懸けて、性

悪のエニヤスが乗込んである船を見て焦れ死んだカーセイジ女王の胸の煽を誓に懸けて、女に比べれば何倍となく男は破る、其破つた有つただけの誓言を誓に懸けて、貴郎が定めた其場所で明日きつと會ひませう。

ライサ ちや、きつとですよ。……あ、あそこへヘレナさんが来た。

ヘレナ 出て来る。

ハミ 御機嫌よう、美しいヘレナさん！ どちらへ？

ヘレナ 美しいとおつしやるの？ それは止して下さい。デメトリヤスは貴女のお美しいのに憧がれてゐます。あゝ羨ましい貴女の美しさ！ 貴女目は北極星のやう、貴女の聲の調は、麥が青々と延びて、山樞が咲きはじめる時分に牧羊者の聞く雲雀の聲よりも可愛らしい。病氣は人に傳染るものだが、嗚呼、若し美しさも傳染るものなら、ハミヤさん、わたしお別れる前に、其お顔を傳染して貰ひとござんす。 貴女の其聲を、貴女の其目を、

貴女の其可愛らしい舌の音楽を、此耳に、此目に、此舌に傳染して貰ひとござんす。此世界がわたしの物なら、デメトリヤスさんだけを取といて、其他は悉皆貴女にあげますわ、貴女のやうになられさへするのなら。ねえ、どういふ風の目附をすれば、デメトリヤスの心が此方の思ふやうになるのです？ 教へて下さい！

ハミ わたしや顰面をして見せるんですの、けれども依然お愛しなさるのよ。

ヘレナ あゝ、その貴女の顰面だけの愛嬌がわたしの笑ひ顔にあらうものなら！

ハミ わたしや彼の方を怒鳴りつけるんですの、けれども依然お愛しなさるのよ。

ヘレナ あゝ、わたしや祈つたり願つたりしてるのに此も可愛がつてはくれない！

ハミ 嫌へば嫌ふほど附纏つていらつしやるの。

ヘレナ 慕へば慕ふほどわたしを嫌ひますの。

ハミ ヘレナさん、あの方がさういふ愚かなことをなさるのは妾の科ぢやなくつ

てよ。

ヘレナ 唯その美しいのが貴女の科よ。あゝ、わたし、さういふ科人になりたい！

ハーミ 御安心なさい。もうこれからは妾あの方に逢やしません。ライサンダーさんと妾は今日駈落するんですのよ。わたしライサンダーさんに逢つたまではアセンスを天堂極樂のやうに思つてましたのに、それをあの人が地獄にしたのよ、して見りや妾の情人に如何いふ長所があるんでせう！

ライサ ヘレナさん、わたし其の本心を貴女に打明けませう。明日の晩、嫦娥が其銀色の影を水鏡でながめながら、草の葉を露の珠で飾り、定つて落人を隠すやうにしてくれる其時刻に、わたしたちは窃とアセンスの城門から脱出さうといふのです。

ハーミ さうして、そらよく貴女と妾とが、白ツちやけた櫻草の花壇に寝轉んで、懐しい内密話をしあつたでせう、あそこで妾ライサンダーさんに會ふ筈なの。

さうして彼處からアセンスを後に見て、知らない土地へ往つて、新しい友だちを求めようといふのです。さやうなら、幼な友達さん、なつかしいヘレナさん、わたしたちの爲に祈つて下さい、さうして其功德で、どうぞデメトリヤスさんにお可愛がられなさるやうに！……ライサンダーさん、約束を忘れて下さるなよ、お互ひに、明日の夜中までは、目に戀の糧を絶たねばならない。

ハーミヤ入る。

ライサ 大丈夫ですよ。……(ヘレナに)ヘレナさん、さやうなら。どうか貴女が思つてるやうにデメトリヤスが貴女を思ひますやうに！

ライサンダー入る。

ヘレナ どうしてまア人によつて、こんなに仕合が異ふだらう！アセンス全市で妾はあの人に劣らない標致だと思はれてゐたものを。だつてそれが何に

ならう？ デメトリヤスさんは然う思はないのだもの。他人は悉皆知つてゐることをあの人だけは知らうともしてくれない。ハーミヤさんの目附に目が眩んでゐるのだ、恰ど妾があの人の器量に溺れてしまつてゐるやうに。戀は分量といふことを知らないから、どんな粗末な物をも法外な立派なものにしてしまふ。目で見ないで心で見るのが戀の習ひ。だから戀神は盲に晝いてゐる。それから翼があつて目がないのは、無分別で向う見ずで性急だといふ徴。本體は子供だといふのも道理、思ひ違へや見ちがへが度々ある。恰どいたづらツ子が戯謔に虚言を吐くやうに、戀といふいたづら者も虚言吐いてばかりゐる。現にあのデメトリヤスさん、ハーミヤさんに逢はなかつたうちは、妾より外に可愛い者はないといつて、誓言を霰の降るやうにお爲だつたのに、ハーミヤさんに熱くなるや否や心が盪け、誓言の霰雨もすツかり溶けてしまつた。…往つてハーミヤさんの駈落の

事をあの人に知らせよう。さうすりや明日の晩きツと後を追掛けて彼の杜へお往きだらう。此事を知らせて禮をいつて貰つたところで、割のわるい語だけれど、其往返りに、あの人の顔を見るのが、せめてもの嬉しい骨折料になる。

ヘレナ 入る。

第二場 アセンス市。大工クインスの宅。

大工クインス、指物師、スナッグ、織屋、ボトム、風櫃屋、フルート、鍛冶屋、スナウト、裁縫師、スターエリಂಗ、出で来る。

クイン みんな集まつたかね？

ボトム 書付で以て一人づゝ概括的に呼ばれるが可いだよ。

クイン こゝに名前書があるだ、この中に、此アセンス全市で、此回の御慶事の晩に、公爵さま御夫婦の前へ出て、劇演ること出来るものゝ名前が不残書いてあるだ。

ボトム ビーター・クインスさん、まづ第一に、如何いふ劇だてことオいつて、それから役者の名讀上げて、それからソノ要點に及ばつせいよ。

クイン さア、其劇てのはね、おそろしく哀れッばい喜劇だよ、ピラマステ男とシスビて女がむごたらしくおッ死ぬだ。

ボトム そいつア飛切上等の、しかも面白い劇だねえ。……さア、ビーター・クインスさん、其名前書で役者の名呼ばらつせい。……さア、一同もツとずツとおッばだかるだ。

クイン 予呼ばるからね、返辭さつせいよ。……織屋のニック・ポトムさん。

ボトム こゝだ。俺何役演るだか言つておいて、後オいはつせい。

クイン ニック・ポトムさん、お前さんはピラマスを演る筈になつてるだ。

ボトム ピラマステのは何だね？ 情人かね？ 敵役の王さまかね？

クイン 情人だよ、戀故に、われとわが手で、見事に自害しておッ死ぬ男だ。

ボトム そいつア巧く演らかしやア涙出させる役だね。俺が演る日になると、観者

ア眼玉の用心しねえけりやなるめえ。俺大あらしをおッばだかせてくれべい、中々惘然に演つてくれべい。……さ、他のを……だけんど俺實は悪王の役が柄にあるんだ。ヘラクレスが猫打裂く役なら、俺滅法界もなく演つてのけて、一同の土手ッ腹でんぐり返らせてくれるだか。

巖々たる巖石に

地獄の門がツきと折れ、

錠前碎けて散亂しれば、

遙か向うに大日輪の

光りに刃向ふ悪魔もなく、

あらたかなりける有様なり。

高尚なもんだつたせい！……さア、他の役者の名前呼ばらつせいよ。：

こりやヘラクレスの詞だ、悪王役の詞だ。情人となると、もうちツと哀

れツばいや。

クイン 風櫃屋のフルートさん。

フルー ここゝにをりますだ。

クイン フルートさん、お前さんは是非シスビの役ウ演つてくれさつし。

フルー シスビてのは何だね？ 武者修行のお武士かね？

クイン うんにや、娘さんでね、ピラマスがそれに打惚れんけりやアなんねえだよ。

フルー やア、どうか予女演ることア堪忍してくれつさい、髭が生えかゝつてるだ

からね。

クイン そんなことアカまはねえ。何なら假面かぶつて、さうして出来るだけ小せ

え聲で物いへば可いだ。

ポトム 假面で面隠すこと出来るなら、シスビも俺に演せてくれさつせいよ、俺お

そろしく細ツこい聲で物いふべいから……ま、こんねえな風に……「あゝ、

ピラマスさん、わしの大事の〜戀人さん！ お前の大事のシスビぢやが

な！ お前の大事の奥さんぢやがな！」

クイン うんにや、お前さんは是非ともピラマスを演るだ、さうしてフルートさん

は是非ともシスビを演んなさるだ。

ポトム よし、その後を。

クイン 裁縫屋のロビン・スター・ゼリンググさん。

スター ここゝにをりますだ。

クイン ロビン・スターゼリングさん、お前さんは是非シスビの母親を演んなさるだ。…鍛冶屋のトム・スナウトさん。

スナウ こゝに居りますだ。

クイン お前さんの役はピラマスの父さんだ。予の役はシスビの父さんだ。…指物屋のスナッグさん、お前さんは獅子の役だよ。…これで役割は済んだ筈だ。

スナッグ 獅子の役の詞は書いてあるだかね？ あるなら、渡してくれつさい、予暗記えること遅ッこいだから。

クイン 出たら目にやれば可いだよ、唸るだけだからね。

ボトム その獅子も俺にやらせてくれさつせいで、俺誰れが聞いても嬉しがるやうに唸つてくれべいから。公爵さまが聴いて、感心して「もう一度べい唸らせろ、もう一度べい」といはつせるやうに唸るべいから。

クイン あんまり怖く唸つた日にやア御臺さまやお姫さまがたが、ほんとに怖がつて、わめき出さつしやるべい。さうなると絞罪騒ぎだ。

皆々 そんなえな事があつた日にやア、一同絞罪にされッちまふべい。

ボトム なるほど、おツかながつて女中たちが気が狂ふやうだと、見さけひがなくなるだから、こちとらを絞罪にするかも知れねえ。だけど俺思ひ切細ッこい聲して乳吸ふ鳩ツ子のやうに唸るべい。鶯が唸るやうにやるべい。

クイン お前さんはピラマスしか演られねえだよ。ピラマスは、お前さん、綺麗な顔の人だに、立派な人だに、夏の日永にでも見てゐたい人だに。好いたらしい、お歴々らしい人だに。だからお前さんは是非ピラマスを演んなさよ。

ボトム ちや俺それ演るべい。髭アどんなのを附けたら可いかね？

クイン 何でも好きなのを附けさつしやるが可い。

ボトム 藁色の髭で演るべいかな、橙々色のにしべいかな、赤紫色にしべいかな、あの真黄色の佛蘭西金貨色で奴にしべいかな。

クイン 佛蘭西の臘梨頭にや全然毛のねえのがあるだから、いつそ髭なしがよかつべい。さア、これで役は定つた。で、どうかね、わし頼むだから、お願するだから、お請願するだから、今夜中に暗誦して、市から一哩の、あの宮殿杜へ集つてくれつさい、月があるだから。あそこで稽古すべい。もし市中で爲るやうだと、そろそろ人が附いて來べいから、目論見が露見してしまふべい。わしそれまでに此劇に要るだけの小道具しらべしておくべい。

ボトム 集るべい。あそこでなら思ひつきり大膽にも卑陋にも稽古すること出来るだ。骨エ折つて完全に暗記えさつせいよ。さいなら。

クイン 公爵櫛の處だせい、出會ふのは。

ボトム 合點だ。弓弦が切れようと切れめえと。みなく入る。

* * * * *

第二幕

第一場 アセンス附近の森林

左右より、一妖精とバツクと出て来る。

バツク

おや、精霊さん、めづらしいね！ どこへ行くんだ？

妖精

どこへでも、どこへでも、

岡へも、谷へも、

藪の中へも、茨へも、

園へも、庭へも、

水の中へも、火中へも

お月さんより足早に、

ひよつくら〜出かけます。

お仙女さまの御意のまゝ

丘の緑の草の輪に、

露を打つのが吾等の役目。

のつぼの〜九輪ざくらは

お仙女さまのお抱へ近昵で、

金地の羽織の斑點は

恩寵の章の紅色玉、

いつまでも變らぬ色香の。

彼方へも此方へも、予は露を探しに行つて、どの九輪ざくらの耳朶へも眞

珠玉を掛けてやらねばならぬ。さやうなら、武者者さん、あばよ。お仙女さまも、お附の妖精たちも、もう直に此處へ来るのよ。

バック

今夜は此處でオベロンさまが底抜騒ぎをさつしやる筈だ。お仙女さんは、うつかり其鼻の先へござらんはうが可からう、王さんは怖ろしく機嫌がわるくツて、氣が荒いから。といふ仔細は、此間お仙女さんが、つひぞ手に入つたこともないやうな可愛い取換ツ子を印度の王さんの許から盗んで来てお小姓にしてござるのを、オベロンさんが羨ましがつて、杜を廻る時の伴侍士にしたいから譲つてくれろツて強請つたんだけれど、お仙女さんが聴かないで、其可愛い小僧に花冠なんかを被せて、いとしがつてゐる、だから此頃は二人が面さへ合せりや、森林であらうと、草場であらうと、清水の傍でも、金砂子の星月夜でも、口論の始まらない時はない。其度に小妖精どもは怖がつて、みんな橡實の中へ這摺込んで隠れてゐらア。

妖精

お前は、おいらが見ちがへてゐるんでなけりや、あのロビン・グッドフェローといふ悪戯者の精靈さんだらう？ 村の娘ツ子を脅すのはお前さんぢやなくツて？ 乳汁の上皮を抄つて取つたり、とんでもない時分に石臼をごろつかせたり、牛酪を製る女房の邪魔をして空汗を流させたり、手製酒の醗酵を止めて見たり、夜路に人を迷はせたりして、面白がつて笑つてゐるのはお前さんぢやなくツて？ 人によつてはお前さんの事をホブゴブリンだの、バックちやんだのと呼んでゐる、するとお前さんは然ういふ人間にやアいろんな善い事を爲てやつてませう？ え、そのバックさんぢやなくツて？

バック

然、君のいふ通りだ。僕が其陽氣な、夜の地廻だよ。僕はオベロンさんにだつて戯けて、肥つて盛り切つてゐる馬めを誑す爲に、牝馬に化けてヒ、ン／＼と嘶くといふと、オベロンさんだつて笑ひ出さアね。時によつちや

焼林檎に化けて、饒舌婆さんの麥醪碗の中に隠れてゐて、婆さんが飲まうとする、唇頭まで跳上つて、萎びた胸の垂肉の上へ麥醪をぶツかけてくれる。仔細らしい顔の小母が、大真面目な話をする、折々僕を三脚床と間違へて、太尻を載けやうとする、と僕がひよいと脱ける、婆さん顛倒つて「畜生ッて怒鳴つて、コン〜コン〜と咳込む、すると一同が腹を抱へて笑ひ出す、面白がつて鼻をシュー〜言はせて、曾ぞ如是をかしいことアなかつ

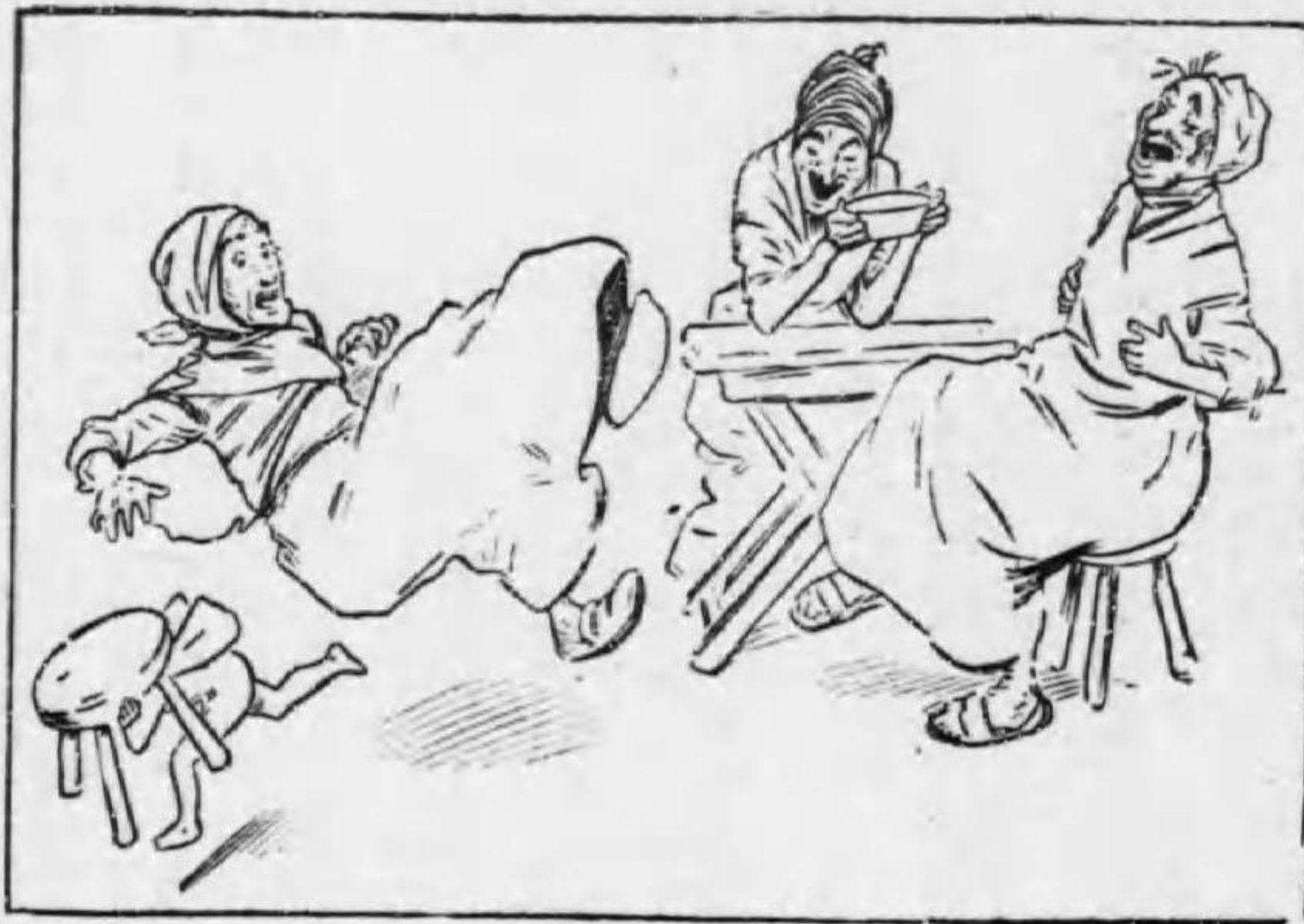


たと言はアね。…が、そこを退きたまへ！ オベロンさんが来たよ。

妖精

さうして、此方からはお仙女さまが。あゝ、オベロンさんが早く去ツちまへば可いがなア！

一方より妖精群の雄王オベロン其従者ら(大抵は翼の生えてゐる小妖精)を伴つて出て来る。と他方より同じく妖精群の雌王チテニヤ其従者の妖精共を伴つて出て来る。



チテー 何ですツて、嫉妬家さん？ …妖精ら、さツさとお跳び。わたしアあの人

オベロ

尊大家さん、わるい處で逢つたねえ月夜に。

とは決して一しよに臥たり遊んだりはしない筈だから。

オベロ 待ちな、向う見ずの淫蕩者。予は汝の殿さまぢやないか？

チテ一 ぢやわたしは汝の奥さまでなくツちやならない譯だけれど、わたしや汝が

妖精國から窃と脱出して、コリンといふ牧羊者に化けて、麥藁笛を吹いて、

日がな一日あの色ッぽいフイリダを戀歌で口説いてゐたのを知つてゐる

よ。何の爲に汝は此處へ歸つて來たらう、印度のあの遠い高嶺から？ あ

の長靴を穿いた、體格の大きい女丈夫どのを、汝の好きな女武者の情婦と

のをシ、ヤスの許へ嫁入させる爲でなければ。汝は二人の結婚を祝福し

よう爲に歸つて來たんだらう？

オベロ チテ一ニヤ、よし予がヒポリタに可愛がられてゐたからつて、汝どうして

そんな譏刺が言へる、シ、ヤスとの内密事を予に知られてゐながら？ 汝

はシ、ヤスを彼男が手籠にしてまで可愛がつてゐたベリグーナから引離

して、薄明りの夜半夜あつちこつちと伴廻つたぢやないか？ それから女

神のイーギリスとの約束をも破らせたぢやないか？ アリヤドネ姫との

約束をも、アンチオパとの約束をも？

チテ一 そりや悉皆嫉妬根性が虚構へた根無し事よ。此中夏の始からは、何處で顔

を合せても、岡でも、谷でも、杜でも、牧でも、石を敷いた泉、葎の茂る小河、

濱への砂原、何處でも逢ひさへすりや囂々とお言ひなので、折角風の笛

に合せて例の輪踊をさせようと思つても、恨みが滅却になつてしまふ。だ

から、空笛を吹かされた風めが、返報半分に、海から毒霧を吸上げたわね、

それが雨になつて降りはじめ、小さい川まで膨脹つて溢れ出した、牛も軛

を働かせたのが無効になり、農夫も汗を流したのが何にもならず、麥はま

だ髯も生えぬ青二才の間に腐る、圃は泥沼のやうになつて、羊小屋は空洞、

病死した家畜で鴉ばかりが肥る。「九人戯」も泥に埋れ、草原の妙な迷路も、

踏手が無いので、身分らなくなつてしまふ。人間界に冬の慰樂といふものが更に無く、夜になつても、讚美歌も祝ひの歌も聞えない。だから、海の支配者のお月どのが、腹を立て、蒼白になつて、四方八方を水氣だらけにして、濕氣の病を流行らせる。それから此亂脈が因で、現に季候までが狂つてゐる。眞紅な、今咲いたばかりの薔薇の花弁の中へ眞白な霜が置く、嚴冬の冷い禿頭の上へ、好い香りの、夏の可愛らしい花の冠冕が、まるで馬鹿にしたやうに載けられる。春も、夏も、實る秋も、荒れる冬も、例とは異つた行装をして出て來るので、其産物だけでは、どれが孰れやら見分けられない。かういふ不祥事が幾らもく起るのは、悉皆お互ひの喧嘩口論が因なのよ、わたしたちが其親であり、源でもあるのよ。

オベロ
ちや汝が改すが可い。汝次第だ。チテーニヤは何故夫のオベロンに逆ふのだ？ 予は只小ちやい童を小姓に呉れるといつてるばかりなのに。



チテ

お諦めなさい、あの兒は妖精國全部とだつても交換へないのよ。彼兒の母は大のわたし信者で、あの香料の匂ひの満ちた印度の空の下で、折々夜中にわたしの傍へ来てお饒舌をしたり、大海原の、あの黄ばんだ砂原で、わたしと一しよに蹲踞んで、商人船の幾つもの沖へ出て行くのを算へたりして、帆が多情な風に孕ませられて脹腹となるのを見ては笑つたわね。其帆の後をば彼の女が……恰ど其時分は、お肚に彼の小童を有つてゐたので：可愛らしい、泳ぐやうな腰附をして、追掛け、わたしが小石か何かを遠くへ抛げると、砂原を帆の真似をして走つて行つて、それを取つて歸つて来たのよ、どつさり商品を積込んで航海から歸りでもするやうに。けれども、人間だから、彼兒の故で死んでしまつた。彼女の爲にとて育てた子供だから、わたし如何しても手離さないの。

いつまで此森林の中にある積りだい？

オベロ

テテ

シ、ヤスの婚禮が済む時分まではおとなしくして輪踊の仲間へ入つて、わたしたちの月夜遊びを見物する氣なら、一しよに來ても可いけれど、さうでなくば彼方へお行き、わたしも汝の方へは行かないから。

オベロ

あの童をくれる、さうすりや一しよに行くから。

妖精國を悉皆貫つても否よ……妖精ら、さア。此上こゝにゐると喧嘩をはじめなけりやならない。

チテ

チテニヤ 其従者の妖精どもを引きつれて入る。

オベロ

勝手にしろ。此杜を出しやしないぞ、予が此返報に汝を苦めてやるまでは……おい、バックや、こゝへ來い。汝覚えてゐるだらう、いつぞや予が或岬に腰を掛けてゐて、人魚が海豚の背に乗かつて、美麗な聲で歌を唱ふのを聴いてゐたことがあつたのを。荒い海さへも彼聲を聴いて穏順くなつてしまつた、星さへも彼海處女の音楽に聽惚れて、氣が狂つて、幾つ

もく圓座から射るやうに迂り落ちた。

バック 記えてゐます。

オペロ

あの時に予が見た……汝には見えなかつたらうが……清浄な月と地球との間に、例の弓矢を取揃つたキュービッドの姿を見た。彼れは恰ど其時西方に近い高御座に腰を掛けてゐた一人の尼姫君に靨を附け、戀の征矢をよつびいて、千萬の心臓をも射貫しさうに飄と放つた。けれども其キュービッドの炎の征矢も、氷の月の淨い光に消されたらしく、其氣高い尼君は、浮いた戀の氣振もなく、不穢童貞の想に黙して、其場を通り過ぎてしまはれた。が、其キュービッドの放した矢は、西國の或小さい草の花に落ちて中り、乳白であつた其花が、それからは、戀の手傷の爲に、赤紫色になつたので、娘らは彼草の事を「懶惰な戀草」と呼んでゐる。あの草の花を……先だつて教へておいた筈だ……取つて来てくれ。あの花の液を眠てゐる者の目蓋に

バック

塗れば、男でも女でも、必ず目の開いた其途端に見た物に見さかひもなく惚れてしまふ。あの草を取つて来い、さうして直戻つて来い、鯨が一里半とは泳ないうちに。四十分で地球に帯をさせて御覽に入れます。

バック 飛ぶやうにして入る。

オペロ

あの液が手に入つたら、眠てゐる時分に、チテーニヤの目へ注してやらう。さうすりや覺めた途端に見る者に惚込んで、それを一生懸命に追廻すだらう、獅子、野牛、熊、狼、いたづらな猿、せわしない尾なし猿、何であらうと。それから、其まじなひを彼女の目から消す前に……他の草を使へば直消される……あの美兒を渡させてしまはう……が、だれか来る？ 予の姿は見えないのだから、こゝで立聞きしてやらう。

デメトリヤス 出て来る直その後からヘレナが追掛けて出る。

デメト わたしは貴女を愛しちやアゐないのだから、尾いて来ちやいけないうよ。……
 ライサンダーとハーミヤは何處にゐるんだか？ 男の方は殺してやらう
 と思つてゐるんだけど、女の方にや此方が殺されツちまふ。二人は此杜へ



逃込んだと貴女が言つ
 たから、やつて来たんだ
 が、ハーミヤに逢へない
 から、木の中にゐたつて、
 氣が氣ぢやアないや。
 え、去ツちまつて下さ

い、もう従いて来ちやいけないう。

ヘレナ だつて貴郎が引くんだもの、磁石男、酷い、磁石男、貴郎に引かれたつ
 ても、わたし酷い頑固な鐵ぢやアないことよ、忠實な鋼鐵よ。貴郎さへ引か

なけりや、わたし従いて行かうたツて、行かれやしないわ。

デメト

おや、わたしが貴女を誘引るツて？ 艶辭でも言つたことがあるかい？

頭から、露骨に、貴女は好かない、好くことは出来ないといつてゐるぢやない
 かね？

ヘレナ

さういはれたつて尙わたし貴郎が好きよ。わたしは貴郎の狎よ、だから、
 撲たれ、ば撲たれるほど、尙と尾を揮つて附纏ふのよ。狎のやうに扱つて
 下さい、蹴飛ばして下さい、撲つて下さい、かまはないどいで下さい、放棄
 ツといて下さい。只ねえ、やくざ者ですけど、従いて行かせて下さいよ。
 犬扱ひで可いから可愛がつて下さいといふ位低いお願ひはないでせう？
 でも、わたしに取つては、それが大變に結構な位置なのよ。

デメト

あんまり戯けた眞似をなさると、心底から憎みますぞ。何故ツて、わたし
 は貴女の面を見ると病氣になツちまふ。

ヘレナ わたしはまた貴郎の面を見ないと病氣になツちまふ。

デメト 貴女は非常に女の謹慎に背いた不都合な振舞をしておいでなさるよ。市を立離れて、貴女を愛してもゐない者の手に一身を委ねるなんて。油断のならない夜中に、邪念を起させ易い森林の中へ、處女性といふ寶物を持つてうか／＼やつて来るなんて。

ヘレナ 貴郎の人格が然うしても大丈夫だといふ妾の保證よ。貴郎の面さへ見りや妾非常に明いやうに思ふから、今も夜だとは思ひませんし、此森の中にあつても、決して浮世を離れたとも何とも思ひませんの、わたしに取つては貴郎が全世界だもの、前に世界ぢうの人がゐるも同様だもの。淋しい筈は無いぢやなくつて？

デメト わたしや逃げるよ、さうして簞か何かの中へ隠れツちまつて、貴女を荒熊や狼の勝手にさせるよ。

ヘレナ 荒熊だつて貴郎ほど残忍ぢやなくつてよ。逃げるならお逃げなさい。昔話を顛倒返しにしなけりやならんばかしよ。アポロが逃げるとダフネが追

掛ける。麒麟を鳩が、虎を孱弱い牝鹿が捉まへようとするの。無効な骨折だわ、弱い者が追掛けて、強い者が逃げるんだもの。

デメト わたしや貴女と問答なんかしちや居られません。行かせて下さい。強ひて従いて来ると、森の中で如何いふ酷い目に逢はせるか知れませんかよ。

ヘレナ 然、貴郎は始終わたしを酷い目にお逢はせなさるのよ、お堂でも、市でも、原でも。あんまりだわ、貴郎は！ 貴郎の仕向けは女性全體の侮辱です。わたしらは男のやうに力づくで戀をすることは出来ない。女は仕掛けられるやうに出来てゐて、仕掛けるやうには出来てゐないから。……

此うちにデメトリヤスは逃げて入る。
従いて行きますよ、戀ひしい人の手にかゝつて死ぬのなら、地獄の苦みも

天堂の幸福なんだから。

ヘレナも追うて入る。

オペロ

さやうならよ、女神さん。今に、此社を離れない間に、汝の方が逃げて、あの男の方が追掛けるやうになるだらう。……

バック 飛ぶやうにして出て来る。

花を取つて来たか？ 御苦勞さうさ。

バック

へい、これです。

オペロ

さ、與れ。……(花を受取りて) 此社の中に野生の麝香草の咲亂れてゐる堤があるが、あそこには九輪草も咲いてをれば、莖もはいちやいをやつてをり、青と滋る忍冬や美しい香りの麝香薔薇や野茨が其上を掩つて、自然の天蓋が出来てゐる。チテーニヤは、夜は時々、あの花の中で面白い踊に慰められて眠入つてしまふ、と小蛇が瑠璃のやうに光る皮を脱いで其腰へ被せか

バック

けるが、小仙女の搔卷にはそれで以て十分だ。予は此草の液を彼女の目へ塗附けて、汚い、厭アな空想を抱かせるやうにしよう。汝も此液を幾らか持つて行つて、此社の中を歩き廻つて……アセンスの或美人が或若い男に惚れてゐるが、男は女を見下げきつてゐる……その男を探して、それを目に塗つてやれ。が、目を開くや否や、其婦人を見るやうにしなければいけないぞ。アセンス服を被てゐる男がそれだ。よく注意してやんなよ、女よりも男の方がすつと夢中になるやうに。それから一番鶏の啼く前に予の許へ来るんだぞ。

大丈夫です、かしこまりました。

左右へ別れて入る。

第二場 森林の他の方面

チターニヤ 其従者の妖精群をつれて出る。

チター

さア、輪踊をお始め、妖精節をお唱ひ。それが済んだら、二十秒ばかりの間仕事に行ツといで。誰れかは麝香薔薇の螟蛉を取つておやり。誰れかは蝙蝠退治に行つて、彼奴の柔革のやうな翼を取つて来とくれ、豆妖精共の服を製へてやりたいから。それから誰れか往つて彼の喧しい鼻めを逐ツとくれ、毎晩フー、フーといつて、我家の小奴共を嚇していけなから。さア、わたしが眠附くまで歌を唱つて、それから仕事をおし。さうしてわたしを休ませとくれ。

此間に妖精らの舞踊があつて、それが済むと第一の妖精が

音度を取りて下の歌を唱ふ、其一部は獨唱、其他は妖精群全體の齊唱。チターニヤは四方に美しき種々の草が咲亂れ、忍冬などが纏ひつきて、おのづからなる四阿をなしてゐる。小高き處の花土手に凭れかゝりて、徐かに眼に就かうとする。

(唄)

第一妖

ぼつ、模様、舌が二つのお蛇さん、
刺々だらけの蝟、来るなく、
蝶蝶よく、足なし蚪蜴よ、悪戯すな。
来るなよく、お仙女さまのお傍へは。

(齊唱)

妙音鳥よ、節面白く、
歌へ、ねんね唄を。

ラ、ラ、ラ、ラ、ビー！

ラ、ラ、ラ、ラ、ビー！

此方の大切なお仙女さまにや
恙も、障りも、魔も附かぬ。

そんなら御寢なれ、ねんねこせい。

第一妖

巢造り蜘蛛めら、こゝへは来るな。

脚長蜘蛛めよ、彼方行け、彼方行け、

黒甲蟲、傍へも寄るな。

毛蟲も、蛞蝓も、悪戯すな。

(齊唱)

妙音鳥よ、節面白く、

* * * * *

第二妖

さア、彼方へ〜！ もうこれで可いの。一人だけ離れて見張をするんだ。

妖精ら皆々入る。チターニヤ眠る。

オベロン出て来りて、チターニヤの傍へ立寄る。

オベロ

何でも目の覺めた時に見る物を（と言いつゝ、花の液をチターニヤの瞳上へ絞りかけて）
眞實に戀しいと思ひ込んだよ、一生懸命にそれに戀ひ焦れるんだよ。豹でも、山猫でも、熊でも、野猪でも、何でもかでも、目の覺めた途端に見りや可愛く見えるんだぜ。何か汚らしいものが来た時に起きろ。

オベロン入る。

ライサンダーとハーミヤと出て来る。

ライサ

ハーミヤさん、森林の中をうろついたので、貴女大變に切なさうですねえ。

實はわたし路を忘れツちまつたのです。ねえ、貴女が可けりや、こゝで休んで、夜の明けるのを待ちませうよ。

ハ一三 さうしませう。貴郎も寢處をお捜しなさい、わたしは此土手を枕にしますから。

ライサ それを二人分の枕にさせようよ。ね、心の臓も一つ、寢床も一つ、胸も一つ、誓約も一つ。

ハ一三 いゝえ、不可ません。どうぞ、後生ですから、もつと其方で臥て下さい、そんなに近いところで臥ちやいけません。

ライサ おや、如何しようといふのでもないんですよ！ 愛の相語るや互ひに能く相解すですよ。わたしは只二人の心の臓と心の臓とは縫合されてゐる、二人の胸は一つの誓で繋ぎ合されてゐる、だから胸は二つで誓約は一つといつたんですよ。だから貴女の傍で横にならせて下さいよ。傍で横になつ

たからつて、横しまなことなんかしやしません。

ハ一三 巧いことをおつしやるわねえ。わたしが貴郎を假にも横しまを働く人だといはうとしたのであつたら、わたしの無禮無作法をどんなにも叱つて下さい。けども、ねえ、貴郎、眞個にわたしを愛して下さるのなら、もつと離れて臥て頂戴。慎みとしては、誰れに見られたつて差支のないほど離れて臥るのが、正しい獨り身の男女にふさはしいことでせう？ ……然、その位離れて。…さやうなら、お寢みなさい。生きてお在の間は、必ず變つて下さいませな！

ライサ 何卒其當然な祈禱の通りに。わたしが誠實を失する時は、此命をも失する時であるやうに！ わたしはこゝで寢よう。眠りの神よ、どうか十分の安眠を此婦人に與へて下さい！

ハ一三 祈つてくれる人へも、何卒その半分だけを！

二人位置を隔て、芝土手に凭れて眠る。
バック出て来る。

バック

森の中ぐうを探したけれども、
たつた一人のアセス人にも逢はない、
惚れる薬の此花の液を、
そいつの目蓋に塗らうと思ふが。
真闇で寂しいなア！ や、だれだ？
アセス人の服装をしてゐる。
これだな、檀那のさういつたのは、
アセス娘につんけんするのは、
さうして娘も、こゝに眠てゐらア、
濕つた、穢い地面の上に。

可哀さうに！ すぐ傍へは臥得ないや、
此情知らず、戀知らずめの。
やい、武骨者、汝の目へ……

といひつゝ、花の液をライサンダー
の瞭上へ絞りかける。

有りツたけ薬を振懸けるぞ。
覺めたら戀氣だ、眠氣はさらばだ。
俺が去つたら目を覺しなよ、
これから俺はオペロンさんの許へ。

バック 入る。
デメトリヤス 急ぎ足に出で来る。
ヘレナ 追掛て出る。



ヘレナ デメトリヤスさん、殺されても可いから、待つて下さい。

デメト 去ッちまひなさい、そんなに附纏つちやいけない。

ヘレナ まあ、貴郎は妾を闇黒の中に棄て、行くの？ ねえ、伴れてつて下さい。

デメト 従いて來ると危険ですぞ。わたしは獨り行くんです。

デメトリヤス 入る。

ヘレナ あゝ、わたし息が絶れる、馬鹿な追掛くらをしたもんだから！ お祈禱を

すればする程、お恵は少いんだもの。ハーミヤさんは、今頃は何處に臥て

ゐるのか知らないが、幸福な人。あの人は、けつこいな愛嬌のある目を有

つてるんだから。あの人の目は如何してあゝ涙を流してらるだらう？ 涙の故

ぢやない。其故なら、わたしの目はもツとく涙で洗つてるんだもの。

駄目々々、わたしは荒熊よりも見ツともないのだけ、獸類でさへ妾に逢ふ

と怖がつて逃げるもの。それだもの、デメトリヤスさんがあんなに妖怪か

ら逃げるやうに逃げて行くのも不思議はない。あの鏡めは……わたしの

目をあのハーミヤさんの星のやうな目と比べさせようとした鏡めは……

何て性悪な偽善者だらう！……おや、だれか居るわ！ ライサンダーさん

だ！ 地面に！ 死んでるのか！ 眠てるのか？ 血は見えない、傷もな

い……ライサンダーさん、もしく、生きていらつしやるなら、お起きなさ

い。

ライサ

(尙夢心地の體で) 然々、火の中へでも入りますよ、貴女の爲になら……

と目を覺してヘレナを見て恍惚となる。

あゝ、水晶のやうなヘレナさん！ 自然の妙工とは是れだ、貴女の胸元が

透徹つて美しい貴女の心が見える！……デメトリヤスめは何處にゐます？

あの汚はしい名前は、當然わたしの劍に貫かれて死すべきです！

ヘレナ ライサンダーさん、そんなにおつしやるなよ、そんなに。よしんば彼の人

が貴郎のハーミヤさんを戀ひ慕つてゐるからつて。戀ひ慕つたつて可いぢやないこと？ ハーミヤさんの心は變らないんだから。安心していらつしやい。

ライサ

安心してゐろつて、ハーミヤだけで以て！ いゝえ、後悔千萬です、あんな女と何時間も詰らない話をしてゐたかと思ふと。わたしの可愛と思ふのは、ハーミヤではなくつてヘレナです。だれだつて、鴉は止して鳩の方を取りますよ。男の心は理性に支配されるもんです、ところで理性は貴女の方がずつと立派だといひます。凡て物は、其季節が來ないうちは熟さないものです、わたしも若いので、今日までは尙理性式には熟してゐなかつたのですが、やつと今人智の頂に觸れかけたので、理性が意志を將るやうになつて、貴女の其目を見させたのです。で其けつこつうな愛の寶卷の中に、眞愛の聖書の書いてあるのを讀んだのです。

ヘレナ

如何いふ因果で妾は如是に酷く嘲弄されるんだらう？ 何時わたしが貴郎に如是にされるやうな事をしました？ 妾はデメトリヤスさんに一寸でも優しい目附で見えて貰ふことさへも出来なかつた、今だつて、將來だつて出来やしない、といふ事だけで以て、それでもう澤山ぢやなくつて？ え、澤山ぢやなくつて？ 尙其上に不束な妾を嘲弄しなくつちやならないのですか？ ほんとに貴郎は酷いよ、ほんとに酷いわ、そんな風に馬鹿にしてお口説きなさるのには……けれど、さやうなら。わたし據ろなく言はんけりやならない、貴郎は如是方だとは夢にも思つてゐなかつたのに。あゝあゝ、一人の人に嫌れた上に、それを又他の人にさんぐ嘲弄されなけりやならないといふは！

ヘレナ泣きながら入る。

ライサ

ハーミヤのゐるのに氣が附かなかつたらしい……ねえ、ハーミヤ、そこに

眠てゐな。ライサンダーの傍へは最早決して来なくても可いよ！ 一番美味い物の食傷が最も可厭な感じを胃に覚えさせるやうに、又邪宗門が其迷信から醒めた者に最も激しく嫌はれるやうに、汝は子の食傷でもあり、邪宗門でもあるから、人に嫌がられるといふ中にも、最も子に嫌がられるのだ！ あゝ、子の有る限りの力よ、愛をも力をも傾けてヘレンさんを尊敬しろ、ヘレンさんの家來になれ！

ライサンダー 入る。

ハ—ミ

(夢を見て甦れたる體にて) あれい！ ライサンダーさん、あれい！ 早く取つて頂戴よ胸の上を這つてる蛇を！ …(目を覺して) あゝ、情ない！ 何てま夢だつたらう！ ライサンダーさん、ほら、妾如是に慄えてゝよ、怖くつて。蛇がね、妾の心の臓をすんく喰べてるの、それだのに貴郎はそれを笑つて見てるの。…ライサンダーさん！ おや、何處かへ往つて？…ライサ

ンダーさん！ 貴郎！ おや、聞える處に居ない？ 去ツちまつて？ 音も聲もしない？ あら、何處へ往つたの？ 返辭して下さい、聞えたら。後生ですから、何とかいつて下さい！ あゝ、怖くなつて氣絶しさうだ。聞えないの？ ちや、近くにはゐないんだ。…死神にか、貴郎にか、どちらかに直に逢はう。

ハ—ミヤ泣くく入る。

* * * * *

第三幕

第一場 森林。チターニヤの寢所前。

前幕の通りチターニヤ舞臺のすつと奥の天然四阿の裡に眠つてゐる。それを背にして、舞臺前面へ、大工クインス、指物屋スナツグ、織屋ポトム、風櫃屋フルート、鍛冶屋スナウト、裁縫屋スターズリンが出て来る。

ポトム みんな集つただかね?

クイン 恰どく。此處は稽古をしるにや持つて来いといふ滅法界もねえ處だ。

此草原を舞臺にして、此山查子の簀蔭を樂屋にして、さうして所作して稽古しべい、公爵さまの前でしる通りに。

ポトム ビーター・クインスさん、……

クイン 何だね、ポトムの大將?

ポトム ビラマスとシスピの此喜劇にや如何もそのお氣に入るめえと思ふことがあるだね。先づ第一、ビラマスが己を殺さうツて劍を引こ抜くだが、お姫さま達それ能う忍耐しめえ思ふだが、どうだね?

スナウ 成程オ、こりやどうもとんでもねえこつたねえ。

スター わし思ふに、こりやその殺すちふことを是非その止さんけりやなるめえよ、つまりその。

ポトム 何そんなことが。俺巧くやつてのける工夫があるだ。まづ口上書を作へて、さうして其口上で、劍は使ふけど、怪我させるやうなことア決して無え



スナウ お女中さまたちは獅子を恐怖りやしねえかね？

スター 恐怖るべいよ、きつと。

ポトム 皆の衆、こいつアうんと相談ぶたなくツちやなんねえこんだね。 お女中様たちの中へ獅子引張込むてのは怖ねえこんだからねえ。 何故ツてお前、生きた獅子よりも怖ねえ鳥類なんてものはあるもんでねえからね。 だからこりや注意しなけりやなんねえ。

スナウ だからね、もう一通口上書作へさせて、己れ獅子で無えツて断るだね。

ポトム うんにや、名前も名宣らせなくちやなるめえ、それから面も半分だけ獅子の首根ツ子から見えるやうにせにやなるめえ。 さうして是非己が口で口上を言はせるだね、ま如是鹽梅式にいふだ……え、お女中さまがたに……で無けりや御婦人さまがたに……お願い申し上げるでがすが……といふかね、いや、お請願しまするでがすが……といふかね、で無けりや、御要求しまする

ツて、それからピラマスは眞個に殺されるんぢや無えツて言はせるだ。それから尙安心させべい爲にかう断らせるだ、己れピラマスだけんど、ピラマスぢやア無え、實は絨屋のポトムだア言はせるだ。 さうしりや恐怖るやうなことアあるめえ。

クイン うん、さういふ口上をいはせることにしべい。 その文句は八六で書くだね。

ポトム うんにや、もう二つ倍加して、八八で書かすべいよ。

ですが……どうかその恐怖がらねえで下せえまし、大丈夫ですがすから。
予を眞個に獅子だ思はつしやりますやうだと、予情ねえでがす、予そんなも
のでありましねえだから、うんね、予ア他の人間と變りッこのねえ男でがす
……斯う言つて、それから己が名前宣るだ。有體に指物屋のスナッダ
言ツちまふだ。

クイン あ、さうしべいよ。だがね、こゝに二つむづかしいことがあるだよ。外
やねえがね、お廣間の中へ如何してお月さんを持つて行べいか？ 知つて
る通り、ピラマスとシスビは月夜に出會するだ。

スナウ こちとらが劇する晩にやお月さま出ねえかね？

ポトム 曆だ、曆だ！ 曆で以て、月夜を探さつせいよ、月夜を。

クイン うん、月があるだよ、其晩は。

ポトム それなら劇をする其大廣間の窓戸を開ツばなしとくだね、さうしりやお

月さんが照り込むべい。

クイン さ、さうするか、で無くば、だれか一人荆棘一束と提灯とを持つて出て行つて、
己れお月さまの役しるでがすと斷るだね。それから、まだ一つあるだ。其
大廣間には是非石牆がなくツちやなんねえ。何故ツてね、ピラマスとシスビ
は石牆の隙間から話爲あつたいふだからね。

スナウ どうしたつて石牆持込むことア出来なかつべい。どうだね、ポトムさん？

ポトム だれか一人石牆にならなけりやなんめえ。さうして漆喰か、粘土か、砂混り
かで身體中を塗りこくるだね、石牆に見えるやうに。さうして指を如是鹽
梅式にしてるだね、しると其間からピラマスとシスビが内密話爲ること
なるだ。

クイン それで可いことになりやアもう悉皆可いだ……さ、一同腰イかけてめい
く役割を稽古さつしやい。ピラマスさんから始めさつしやい。白言ッ

ちまつたら、あの簾すだれの中へ入らつしやいよ。さういふ風に、めい／＼きつかけを忘れねえでね。

此時このときバック一同の背後へ出て来る。

バック

(傍自)お仙女さんが眠てござるのに、何だ此手織木綿めらは？ 直傍で囁鳴

り散してゐやがる。何だと、劇が始まる？ 俺が見物人になつてやらう、

事によると、一役勤めてやるぞ。

クイン

さ、ピラマスさん、白だ。シスビさん、出て来るだよ。

ポトム

「シスビどのよ、いかゞはしく愛らしき花の香り、……」

クイン

「かゞはしく」だよ、「かゞはしく」だよ。

ポトム

「……かゞはしく、愛らしき花の香り。御事の息が正しくそれぢや、なつ

かしき、いとしきシスビどのよ。や、人聲がする！ 御事は暫しの間こ

の處にて待つてゐて下されかし、やんがて又お目にかゝりまする。」

ポトム 入る。

バック

(傍自)さうよ、前例のない珍型ピラマスのを、お目に掛けるだらう！

バック 入る。

フルー

こんどは予かねえ？

クイン

うん、さうだ、おめえさんだ。いゝかね、今彼人は、つい何か音がしたんで、

ちよつくら様子見に往つたやからね、又すぐと戻つて来ることになつて

だよ。

フルー

「あゝ、こちらの光る君のピラマスの、百合の花よりも色が白うて、目ざま

しう咲誇る野茨の蕾よりも色が紅うて、いとゞしう可愛い若人どの、

いとゞしう勇ましい猶太人どの、曾ぞ疲れぬ駿馬の忠實さにも劣らぬ殿

御。あゝピラマスの、さらばやんがてネンネの墓地で會ひませう。」

クイン

「ニンナスの墓地」いふだよ。あれ！ それまだいふでねえだに。それビ

ラマスに返答ぶつ時にいふだによ。お前さん悉皆一しよくたに言ツちまつたゞ、きつかけも何もかも。ピラマスが出る、しるとお前さんのきつかけは絶れるだアよ。「劣らぬ殿御」てここがきつかけた。

フルー あゝ、さうかね。……

「曾ぞ疲れぬ駿馬の忠實さにも劣らぬ殿御。」

バック又出て来る。其後からポトム、驢馬の巨大な切首をすっぱり頭へ冠せられながら、少しも心附かぬらしき體にく出て來り白に掛かる。

ポトム 「忠實なのが定ならば、只御事にこそ忠實に。」

一同ポトムの顔を見て大きに驚く。

クイン うわア、こりやどうだ！ こりや不思議だ！ 魔に魅かれたゞ。お祈りさつしやい〜！ 逃げる〜！ 助けてくれ！

クインス、スナツグ、フルート、スナウト及びスターエリングこけつまるびつして逃げ入る。バック腹を抱へて踊り廻りて喜ぶ。

バック

おツかけ、ぼツかけ、汝らに、

ぐる〜踊をさせてくりよ、

沼でも川でも小簀でも

茨原でも關ふこたない。

馬に化けたり、時々は

豚にも犬にも、首無し熊にも火玉にも

化けたりやヒン〜、ワン〜、グー、

吠えたり、燃えたり、取換へ、引換へ、

おツかけ、ぼツかけ、

ぐる〜踊をさせてくりよ。



ポトム 何だつて奴ら逃げて行だかり？

これア必定、俺を怖らせせい思つて悪戯アするだな。

スナウト 又出る。

スナウ あれ！ ポトムさん、お前さん、

ま、變ツちまつたやねえ！ 何て

頭だねそりやア？

ポトム 何て頭だツて？ へん、お前のに

似て驢馬頭かも知んねえ！

クインス 又出る。

クイン はれまア、ポトムさん！ はれま

ア！ お前さん、變ツちまつたや

ねえ！

クインスもスナウトも逃げて入る。

ポトム

奴ら悪計してるだ。俺を驢馬にしせいちふだ。巧くいきや俺を嚇さうち

ふだ。だが俺こゝ動くこんちやアねえ、奴らア何しやがったツて。こけ

えら彼方此方歩き廻つて、唄歌つてくれせい怖つちやわねえツて知らせに。

(歌ふ)

「色の眞黒けな河鴉」

其嘴や朽葉色

調子の狂はぬ大鶉

笛を吹くよな鶺鴒

此唄の間にチテーニヤ目を醒しかける。

チテー

おや、花の中に眠てゐたら、天人が來て起すのか知らん？

チテニーヤ訝しげに四方を見廻してゐる。

ボトム (歌ふ)

「鶯に雀ツ子に雲雀ツ子、

平ツ調子の郭公鳥、

宿六ア馬鹿だと啼くけど、

だアレも否と言ひ得ない。……

何故ツて、だれだツてあんな馬鹿ツ鳥と論判ぶつ者はねえだからな。だれ

が畜類敵手に喧嘩なんかしるもんか、何度「馬ツ鹿ア」と啼きアがつたから

ツて?

チテニーヤ此間ボトムに見惚れてゐる。

チテ

ねえ、お前、人間さん、どうぞもう一遍歌ツとくれな、わしの耳はお前の聲に聞惚れてしまつたの。目もお前の容姿に見とれてしまつたの。始めて逢

つたばかりだけれど、お前があんまり堅人だもんだから、ついわたしの方

から好いたといはなけりやならないやうになツちまふわ。

ボトム

奥さん、どうもお前さまはあんまり正氣ぢやねえやうだねえ。だけれど、今日びア打惚れたりちふと、大概正氣イ亡くするのが定りだがね。正氣イ

亡くしねえで打惚れたらよかつべいに、氣の毒なこんだよ。予これでも即

席に洒落言ふこと出来るだ。

チテ

美しい男の上に聰明なのね、お前は。さうでもねえだ。若しか此森ン中から出得るだけの智慧がありやア、今う

ボトム

んと役に立つだけんど。此森から出たがつちやいけないのよ。お前は此處にあるの、好きでも否で

チテ

も。わたしは並大抵の精靈ぢやアなくつてよ、夏の神なんかは常住わたしに奉公してゐるの、そのわたしがお前に惚れたの。だから一しよにおいでよ。

妖精らに吩咐けて、何でもお前の御用をさせますよ。寶玉を取つて來いと
 いへば、海の底から取つて來ます。それから、花の中でお前が眠てゐりや、
 唄を唱ひます。わたしお前のその汚れた人間性を淨めてあげませう、精靈
 とおなじにふはアリくと歩かれるやうに。……(聲を高めて)豆の花
 や！ 蜘蛛の巣や！ 蛾や！ それから芥子の種や！

小さき翼の生えたる四妖精呼ぶ聲に應じて、順々に、跳ぶや
 うにして出て來る。

第一妖 唯々。

第二妖 唯々。

第三妖 唯々。

第四妖 何處へ行くんです？

チテ！ 此方に善くお仕へするんだよ。

お出掛の時には先に立つて、跳廻つてお目

にかけるのよ。食り物には、杏や木苺や紫色の葡萄や緑色の無花果や桑の
 實を取ツといで。あのブン／＼蜂からは蜜囊を盗んで來な、さうして彼奴
 らの臙塗れの股を切つて來て、蠟燭を製へて、螢の火で點火して、お臥床の
 出入の御案内をしな。それから五色蝶の翼を抜いて來て、扇を製へて、眠
 てゐなざる顔へ月の射すのを掃つておあげな。……さ、一同お腰を屈めて御
 挨拶をするの。

第一妖 萬歳、人間さまよ！

第二妖 萬歳！

第三妖 萬歳！

第四妖 萬歳！

ボトム (會釋を返して)これアどうも御免なせえまし、眞平。お前さまは何方かね？

蜘蛛 蜘蛛の巣です。

ボトム どうぞねえ、蜘蛛の巣さん、以後お心易くして下さいませ。指切つた時分にや御遠慮なしに御無心しますだからね。…お武家さま、お前さまは？

九の花 豆の花です。

ボトム どうぞねえ、お母御さんの柔荑さんとお爺さんの堅荑さんによろしくいつて下せえまし。豆の花の檀那、お心易くして下さいませ。…へい、もし、お前さまは何方だね？

芥子種 芥子の種です。

ボトム 芥子ツ種の檀那、お前さまの忍耐強いのは予よく知つてますだ。あの體格の大かい臆病者の牛肉野郎め、お前さまのお宅の方ア夥多喰アがりましただ。予お前さまの御親類衆のお庇で眞個に何度も泣きましたよ。芥子ツ種の檀那、どうぞ以後お心易くねえ。

チテ (妖精らに) さア、お傍仕へをして、わたしの亭へ御案内をしな。…お

月さんが何だか涙ぐんでるやうね。お月さんが…生娘が手籠に逢つたのを悲しがつて…泣くと、小ちやい花が一同泣くのよ。…さ、わたしの最愛の人に物を言はせないやうにして、そツと伴れといで。
みなく入る。

第二場 森林の他の方面

オベロン 出て来た。

オベロ チテニヤは目を覺したか知らん。覺めた途端に目に入ったものを夢中になつて戀ひ慕ふ筈なのだが、何を見たか知らん。…

バック 出る。

使ひ番が来た。…やい、どうした、阿狂？ 何か面白い事が始つたか、此人

臭い森の中で？

お仙女さんが化物に惚れました。先刻うとく眠てござるといふと、あの内密の、大切な亭の傍へ、補綴布子を被た……アセンスの店で麵麩を宛に仕事をする……亂暴な職人共が集つて、シ、ヤスさんの結婚式の餘興に劇をやるんだつて、下稽古を始めたんです。其鈍物共の中でも第一等の虚氣者が、ピラマスの役をして、段取の具合で一旦簾蔭へ入りましたから、好都合だと思つて、其奴の頭へ驢馬の首ツ玉を被せてやりました。すると、シスピの白があつて、其道化の出になるのです。他の奴らめ其れを見るといふと、まるで雁が忍び寄る捕鳥師を見つけて、又は灰色頭の燕鳥が、鐵砲の音でばツと起つて、カア〜啼いて、狂氣のやうに空を八方へ散るやうに、仲間間の奴らそれを一目見ると逃出しました。さうして一つの木の根に躓いて、おツかさなつて轉つて、人殺しと叫く奴もあれば、助けてくれとアセン

スの方へ向いて呼ぶ奴もあり、怖さ恐しさに、何が何やら全然夢中なので、茨や荆棘までが悪戯をはじめて、衣服を引握み、袖を、帽子を引握んで、渡しや何もかも奪ツちまふ。で、怖つて、狂人のやうになつてる奴等をすんずん誘き出し、化けた好男のピラマスだけを彼處に残して來ました。ところで、恰ど其途端に、チテーニヤさんがお起きなすつたので、忽ち驢馬に惚れツちまつたんです。

オベロ 思つたよりも巧くいつた。だが、汝アセンスの男の目に薬を塗つたか、吩咐けておいた通りに？

バック へい、それも濟しました、アセンスの娘てのを傍において眠てるところを。目を醒ましや、きツと彼の娘を見るに相違ありません。

此途端にデメトリヤスとハーミヤと出て來る。

オベロ 静かにしろ。あれが其アセンス人だ。

バック あれが其娘です、けれども男の方は異つてます。

オベロンとバックとは一隅に潜む。

デメト あゝ、これほど貴女を思つてる者を、何故わるくおつしやるのです？ そんな酷いことは、酷いことでもする奴におつしやい。

ハーミ 今はまだ叱つてゐるだけですけれど、妾もツと酷く貴郎を取扱ふかも知れない。何故なら、どうも貴郎は、わたしに呪はれる理由が有りさうでくならないもの。もしも貴郎がライサンダーを眠てる中に殺したのであるなら、もう血の河へ靴を踏入れたのだから、寧ろ膝まで入つて、わたしをも殺して下さい。……太陽だつて、あの人がわたしに忠實である程には、晝の時間に對して忠實ぢやなかつたんだものを。ハーミヤが眠てる間に窃と去ツちまふなんてことがある筈はない！ そんな事があるやうなら、此堅固な地球が掘抜になつて、月が反對側へ通り抜けて、恰ど對蹠人種に眞晝

間を見せてゐるお兄さんの太陽を怒らせるやうなことが起ります。貴郎があの人を殺したに違ひない。殺したから、そんな死んだやうな、凄い顔をしてるんでせう？

デメト いゝえ、殺された者こそ死んだやうな顔をしてゐべきです。わたしが即ちそれです。残酷な貴女に心の臓の眞直中を貫かれてゐるんです。けれども殺人者の貴女は、あの燦爛してる金星のやうに冴返つて、綺麗です、うつくしいです。

ハーミ そんな事はライサンダーに關係のないことです。あの人は何處にゐます？ どうぞあの人を渡して下さい。

デメト 貴女に渡すよりか犬にでもくれてやらアあんな奴は、死んじまやア。

ハーミ 畜生！ 畜生！ もうくわたし堪忍がならない。ぢや、いよく殺したんだね？ もうくお前は人間の數の中へは入らないんだぞ！ さ、直に

白状なさい、白状して下さい。敵同志だつて、頼むんだもの。起きてりや迎も面と對ふことさへも爲得ないんだらうに、眠てゐたから欺し討にしたんだね？ あゝお立派なお手柄ですよ！ 蛇にだつて、蝮にだつて、其位の事が出来なくつてさ。さうだ、蝮に殺されたのだ。お前は蝮だ、二枚舌で人を殺したんだ。貴女はとんだ思ひ違へをして怒つてゐるのです。わたしはラ



イサンダーの血を流した覚えなんかありません。それにわたしはあの人
 が死んだなんぞとは思ひません。
 ハーミ ぢや、どうぞ無事でゐるといつて下さい。
 デメト 假に然うわたしが保証し得たとして、其報酬に何を下さる？
 ハーミ 二度とわたしの顔を見ないといふ特権を献げます。可厭な貴郎にはこれ
 でお別れします。もうわたしに逢つて下さるな、あの人が生きてゐようと、
 わなからうと。

ハーミヤ 入る。

デメト 斯ういふ権幕の時に従いて往つて見たところで爲様もあるまい。だから、
 暫らく此處に止まつてゐよう。眠が支拂停止になると、悲しい事の負擔が
 一段重く感ぜられる、憂愁からの借財が増えるばかりだから。多分その借
 を幾らか支拂つてくれるだらう、こゝで斯うして待つてゐたら。

横になつて眠る。

オベロ (バックに) 汝はとんだことをしてしまつた。まるで人違へをして、眞實な男の目に戀慕液を塗つたんだ。其間違の必然の結果として、不眞實な男が眞實になつたのではなく、ある眞實な男が心變りをしてしまつたんだ。

バック ぢや、運命めが優手をやるんだ。だから、眞實男一人に對して性惡が百萬人だ、どの誓言も、どの誓言も滅茶とくだ。

オベロ 森の中を風よりも速く駆廻つて、アセンスのヘレナを娘を捜して來い。彼女は戀わづらひをして顔の色も蒼ざめて、歎息ばかりして大切な生血を減してゐる。何か幻影を見せて、彼女をこゝへ連れて來い。予は彼女の來るのを見かけて此男の目をまじなつておくから。

バック はい、承知しました。ね、此通りです。韃靼人の矢よりも速いや。

バック 飛ぶが如くに入る。

オベロ

(デメトリヤスの腕に液を注ぎながら)

戀神の矢に射貫れたる

此の紫の草の液よ、

此男の瞳に沁みよ。

醒めてヘレナの面を見れば、

彼の女を金星の如く

美しく見よ、愛たく見よ。

醒めて後は只頼めヘレナを。

バック 又出て來る。

バック

お大將に申し上げます、ヘレナは今直に參ります。先刻予が間違へた若い男が、今頻りと戀の御祝儀で奴を強請つてゐる處です。奴らの馬鹿なお祭り騒ぎを此處にゐて見ませうかね？ 殿さま、人間て者は、ま、何といふ馬

鹿でせう！

オベロ 傍へ寄つてゐろ。そいつらの聲でデメトリヤスが目を醒ますだらうから。
バック さうすりや二人で以て一人を口説くことになるだらう。こいつは面白いや、すてきに面白いや。予は理窟に合はない事が好きだ、途轍法もない事が一番好きだ。

オベロンとバックと物陰へ忍ぶ。

ライサンダーとヘレナと出る。

ライサ どうして貴女はわたしの口説くのを馬鹿にしてるのだとおつしやるんです？ 馬鹿にしたり嘲弄したりするのに涙を流す者はありません。これ此通りわたしは泣いてゐます。涙の中で生れた誓言は、其生れ方が其誠實を保證してゐます。どうしてこれが貴女には嘲弄と見えるんです、嘘でない證據に斯ういふ誠實の紋章まで付けてるのにな？

ヘレナ

いよく種々な謀計をお運らしたるのね。誠實が二つあつて殺し合ひをするんだとすると、それは神聖な戦ひといつて可いやら、極悪非道といつて可いやら！ 貴郎の其誓言はハーミヤさんの爲なんでせう？ 貴郎はあの人を棄てる積り？ ハーミヤさんへの誓言とわたしへの誓言とを二つ秤皿に載せて權つて御覽なさい、兩方が五分々々で、兩方とも空ツ話のやうに輕いでせう。

ライサ

彼女に彼此いつてた時分は、全く無分別だつたんです。

ヘレナ

いゝえ、あの人をお棄なさる今こそ無分別だとわたしは思ひます。

ライサ

彼の女はデメトリヤスが愛してゐます、が、あの男は貴女を愛しちやゐませんよ。

此途端にデメトリヤス目を醒す。

デメト

(ヘレンを見附け、惚々としたる體にて) あゝ、ヘレンさん、女神さん、圓滿

完全な、神々しい！ 戀人さん 貴女の其目を何に喩へよう？ 水晶なんかは濁つてゐる。 あゝ貴女の其唇の……よく熟した櫻實が接吻してゐるやうな……人を唆る其色！ あのトラス山の、東風に扇がれてゐる高嶺の雪だつても、あの凝白だつても、若し貴女が其手を挙げたら、忽ち鴉のやうに見えるでせう。 あゝ其純白の女王を、其天福の證印をわたしに接吻させて下さい！

ヘレナ あゝ、悔しい！ 情ない！ 解りました、貴郎がたは一同一味になつてわたしを馬鹿にして慰みにするんですね。 作法も禮儀を知らないのですか？ で無けりや豈夫如是に妾を侮辱なさることもあるまい。 憎まれるのは分つてゐるけれど、如是に寄つて集つて、嘲弄しなくつても憎むことは出来さうなもんぢやありませんか？ 貴郎がたが若し男なら……見たところは男なんだ……よもや孱弱い者を如是風に扱ひはなさるまい、お

そろしく憎んでゐなさるのは善く分つてゐるのに、種々な誓言をしたり、わたしを稱めて見たり。 貴郎がたはハーミヤさんの愛の競争者なのに、今日はヘレナを馬鹿にする競争者になつたのですか？ 男らしいお立派なお手柄よ、可哀さうな女をさんく馬鹿にして泣かせるなんか！ 人格の高い人なら、娛樂に娘をいちめて、堪忍袋の緒を断らすやうな、そんな酷いことはしないだらうに。

ヘレナ くやしがつて泣く。

ライサ (デメトリヤスに) デメトリヤス、君はあんまり不親切ですよ。 よしたまへよ。 君はハーミヤさんを愛してゐるぢやないか？ わたしがそれを知つてゐるのを君は知つてゐる筈だ。 わたしは今日、全く好意を以て、眞實、心底からハーミヤに對するわたしの要求を棄權して、それを悉く君に譲る。 だから、ヘレナに對する君の要求はわたしに讓歩して下さい、わたしはヘレナを愛

してゐるんです。さうして死ぬまで渝らない積りです。

ヘレナ いかにも人を馬鹿にするんだつて、これほどの出放題をいつたものは昔ツからありやアしまい。

デメト ライサンダー、ハーミヤを君の方へ取ツときたまへ。僕も曾ては惚れてゐたけれども、そりやもう過去ツちまつた。ハーミヤに對する僕の戀は、言はばお客に行つてたといふ格だよ、もう今は本宅のヘレナへ歸つて來ツちまつた、そこに永住の決心で。

ライサ ヘレナさん、ありや嘘ですよ。

デメト 眞實の何たるかを知りもしない癖に、人の悪口なんか言はんが可い、で無いと如何いふ危険な應報が君の身に及ぶかも知れないせ。……あ、あそこへ君の戀人が來た。あ、あそこへ。

ハーミヤ 又出て來る。

ハーミ

暗の夜で目は利かなくなつたけれど、耳は常よりも善く聞える。視る方でも、損しても、聽く方が倍になつたので償はれる。……(ライサンダーを見附けて) ライサンダーさん、此目が貴郎を見附けたのではありませんよ、耳が伴つて來てくれましたの貴郎の聲を聞分けて。それはさうと、何故貴郎はわたしを打棄つてツたの? 酷いわ。

ライサ

どうしてジツとしてゐられるものかね、人が戀しくて堪らない時分に?

ハーミ

ま、わたしを打棄るほどに戀しい人ツて誰れ?

ライサ

ヘレナさんといふ美人が予をジツとさせちや置かないのさ。ヘレナさんは、あゝして彼處に光つてゐる在りとあらゆる星よりも、綺羅星よりも一層夜を飾る美人なのだ。何故お前を打棄つたといふのか? 斯ういつてもまだ分らないか? お前が嫌になつたからさ。

ハーミ

嘘でせう、そりや? そんな筈はないもの。

ヘレナ

(ハーマイヤを尻目に掛けて) あら、あの人も一味なんだわ！ いや／＼解つた、三人とも合體の上で、此人の悪い狂言を仕組んだのだ、わたしをいちぢめるために。……まア意地悪のハーマイヤさん！ 眞個に義理知らずよ貴女は！

貴女も一味なの、貴女までが同類になつてわたしを窘める爲に、如是卑劣な嘲弄をするのですか？ 姉妹のやうに仲よくして、何をするにも一しよに、どんな内密話をも打明け合つて、何時間となく過したことや、其時間の経つのが速いからつて、「時」の歩みの匆忙いのを叱つたことや、まア！ みんな忘れたのですか？ 仲好の學校時代や無邪氣な子供でゐた時分の事を悉皆？ ハーマイヤさん、貴女とわたしとは、細工好の神さまでいもあるやうに、針で以て二人が／＼りで、同じ一つの花を製へました、同じ稽古縫をするとして、同じ蒲團に座つて、同じ調子で同じ歌を唱つてさ、手も身體も聲も心も悉皆絡み合つてゐたかのやうに。さうして一しよに生長つたのでし



た、双子の櫻實が、二箇に見えてゐながら密著いてゐるやうに、一つ莖の二箇の可愛らしい莓のやうに。さういふ風に、身體は二つでも心は一つ……二つ有つたつても、夫婦の紋所のやうに、つまりは一つなのだから、表紋は一つきり……であつたのに。さういふ情誼も何もかも滅茶々々にして、男たちと一しよになつて、不幸な昔の友達を馬鹿にしようといふのですか？ そりやあんまりです、酷ござんす。わたしと一しよになつて、女といふもの全體が貴女の此舉動を罵りますよ、害を受けたのはわたし一人だけれど。

ハリーミ わたし驚いちまふわ、貴女がそんなに眞面目になつてお怒りなされるから。わたし貴女を馬鹿になんかしやしない。貴女がわたしを馬鹿になさるんでせう。

ヘレナ 貴女はライサンダーさんに勸めて、わたしを馬鹿にするために追掛けさせて、わたしの目や顔を稱めさせたでせう？ それから貴女のもう一人の情人に、わたしをつい先刻まで足蹴にしてゐたデメトリヤスさんに、わたしを女神さまだの、圓滿完全だの、神神しいだの、天人だのと、貴女が言はせたのでせう？ 嫌ひぬいてゐるあの人がそんなことをいふ筈はないぢやありませんか？ 一生懸命に貴女を大切にしている人が、貴女を止して妾を眞個に可愛がるなんてことがあらう筈はないぢやありませんか？ 貴女がさせなけりや、貴女の承諾の上でなけりや？ よしんば妾が貴女のやうに幸福でないからツて、運がよくないからツて、片思ひばかりしてゐる不

幸な情ない身だからツて？ それを憫んで下さるのが當然です、馬鹿になさるよりは。

ハリーミ わたし分らないわ、何をおつしやるのだから。

ヘレナ はい、たとへば然うなさい、根氣に眞面目な顔をお続けなさい、わたしが彼方向いた時に舌をお出さない、お互ひに目ませをなさい。面白いお遊びをお続けなさいまし。此お慰みは巧くいつたら、記録に遺るでせう。貴女に少しでも慈悲心か美徳か禮儀かありや妾を如是笑ひ種にはなさらなかつたでせう。……けれど、さやうなら。半分はわたしが悪いのです。それも死んじまふか、居なくなりさへすりや直に治ツちまふでせう。

ヘレナ 泣くく去らうとする。

ライサ お待ちなさい、ヘレナさん。分疏を聞いて下さい。戀よ、命よ、魂よ、ヘレナさんよ！

ヘレナ 巧いことね!

ハミ (ライサンダーに) ねえ、貴郎、そんなにあなたの方をお軽蔑なさるなよ。

デメト (ライサンダーに) ハーミヤさんが頼んでも聽かんやうなら、わたしが無理やりに止めさせて見せる。

ライサ 君の無理やりは彼女の女の頼むのと同格だ。君の恐嚇はあの女の歎願以上の力は有つて居らんよ。ヘレナさん、わたしは貴女を愛してゐます、然、全く命を懸けてゐます。わたしは貴女の爲なら命も惜まない、其命を誓に掛けて、わたしはあの男は虚言者だてことを證據立てます、あの男はわたしは貴女を愛しちやゐないなんて言ふんです。

デメト (ヘレナに) ねえ、わたしは貴女を愛してるのは、彼奴の比ぢやありません。

ライサ (デメトリヤスに) 汝然ういふことをいふなら、さ、別の處へ往つて、其證據を見せろ。

デメト うん、直に來い、さ!

二人は氣色ばみて出掛けようとする。

ハミ (驚いて止めて) ライサンダーさん、ま、どうしようといふんです!

ライサ えい、彼方往け、黒人女め!

ハミ いゝえ、あの方は……

抱き止めて往かせまいとする。ライサンダーそれを振拂はうとする。

デメト (ライサンダーに) 振拂つてやつて來るらしく見せかけるが可い。怒つて追掛けて來るらしく見せかけるが可い。が、來得やしない。汝は臆病もんだ、馬鹿ツ!

ライサ (ハーミヤに) えい、離せ、うぬ、猫、午莠の刺め! 可厭な奴め、えい、離せ。離さない、たゞさ落すぞ、蛇のやうに。

ハミミ どうしてそんなに亂暴におなりなすつたの？ ま、どうしたといふの？

よう貴郎？

ライサ よう貴郎だ？ うぬ、赤鷲色の韃鞨人め、畜生！ うぬ、たまらない臭薬

め！ 不厭なく苦薬め、去ツちまへ！

ハミミ 戲談でせう？

ヘレナ さうとも、戲談ですとも。貴女だつて然うよ。

ライサ デメトリヤス、約束は屹度守るぞ。

デメト あんまり守られさうにもないね、弱いお守紐が止めてゐるから。君のいふ

ことは當にならんよ。

ライサ 何だと？ 此女を撲て、殺せといふのか？ 憎いとは思つてゐるけれど、ま

さかそんなにしようとは思はない。

ハミミ え、わたしを憎む？ それよりも酷い事が出来て？ わたしを憎むツて？

如何いふ理由で？ まア！ 如何したといふの？ わたしハミミヤぢや

なくつて？ 貴郎はライサンダーさんでせう？ わたしの標致は前と變

りやしますまい？ 昨夜は貴郎わたしを愛してゐたのに、昨夜の中に貴郎

はわたしを棄てツちまつた。ぢや、貴郎はわたしを棄てたのね、…あゝ、

鶴龜々々！ え、眞面目で然う言はなけりやならないの？

ライサ うん、全く其通りだ。もう二度と汝の顔は見まいと思つたのだ。だから、

もう絶望的に、問題外的に、疑ひもなく、確定した事だと思ふが可い、これ

ほど確なことは無いのだ。決して戲談ぢやアないぞ、汝は嫌ひだ、ヘレナ

さんは好きだ。

ハミミヤ 驚き呆れる。

ハミミ (ヘレナに) まア！ 欺騙者よ貴女は！ 花蠅蛤よ貴女は！ 戀窃盜よ貴女

は！ まア、貴女は夜中にやつて来て、いつの間にかわたしの大切の人の

心の臓を盗んでしまつたのね？

ヘレナ

上手ね、眞個に！ 貴女は遠慮も慎みも娘らしい廉恥心も恥かしいといふ

氣さへもないのですか？ え、貴女はわたしに疝癪を起させて、亂暴な返

辭をしなけりやならないやうにしようといふのですか？ 酷いわ！ 酷

いわ！ 虚言者、操り人形！

ハーマ

操り人形！……（ぐつと胸に徹へて）然う。成程、然ういふことが御趣意なのね。

解りました、ちやア貴女は妾に比べると丈が高いといふのを規模に、其體様

を、其すらりとした高い姿を武器にして、あの人を迷はしたのですね。

それで何てお高く止まるのですか、妾が如是小びツちよで、さうして矮だ

からう？ え、わたしが如何なに低くツて、塗りこくつた五月竿さんり？ え、

如何なに低くツて？ 低いかも知れないけれども、此爪で以て随分貴女の

目を引掻く位のこととは出来てよ。

ヘレナ

（ライサンダーとデメトリヤスとに）ねえ、貴郎がた、わたしを馬鹿になさるにして

も、何卒あの方に亂暴をさせないやうにして下さい。わたしは曾ぞ惡體を

吐いたことはありませんの。然ういふ方の天分は少しも無いのです。全

くの生娘のやうに臆病なの。あの方にわたしを撲たせないで下さい。あ

の方はわたしよりも丈が低いから、わたしが敵手になり得るだらうと思

ひになるかも知れないけれど。

ハーマ

あらまた、低いツて！

ヘレナ

ハーマさん、そんなに妾を酷くしないで可いでせう。わたしや始終貴

女を愛してゐたし、内密事も善く守つたし、曾ぞ貴女に害をしたことはな

かつた、唯、デメトリヤスさん戀しさの爲に、貴女が此森へお逃になつたこ

とを話したばかり。あの人は貴女を追掛けました、わたしも戀故にあの人

を追掛けました。けれどもあの人は妾を叱つて、歸らなけりや撲るぞ、蹴

飛ばすぞ、殺しツちまふかも知れんぞと威嚇しましたの。さういふ譯です
から、若し静かに行かせて下さりや、妾はアセンスへ此恥辱を抱いて歸り、
もう貴下がたの後を追ひません。歸らせて下さい。わたしは眞個に愚な、
馬鹿アな者なんです。

ハミミ さアさ、お歸りなさいね、それとも誰れか止めるものがあつて？

ヘレナ 愚な心が後に残つて。

ハミミ え、ライサンダーさんに？

ヘレナ デメトリヤスさんに。

ライサ (ヘレナに) 心配しなくとも可うござんす。ヘレナさん、彼女は貴女を如何も
しやしませんよ。

デメト (ライサンダーに) 如何もしやしないとも。よしんば君がヘレナさんの肩を持
つたりなんか餘計なことをすればからつて。

ヘレナ ハミミさんは怒つたりといふと、怖しく口が悪いのです。學校へ行つて

た時分に最早露々屋でしたのよ。小ちやいけれど、氣が強い。

ハミミ また、小ちやいッて！ 低いとか小ちやいとかはッかし！(ライサンダーに)
何故貴女はあんなことを言はせて平氣でゐるの？ わたし行ッつけてや
らなくツちや。

とヘレナに飛びかゝらうとする。

ライサ (それを止めて) 去ツちまへ、小びつちよ。丈縮ませの篇蓄で出來た微分子女

め。南京玉め、椽實め。

デメト 君は餘計なお世話ですよ、ヘレナさんは君に骨折つて貰ふにや及ばないて
ツてます。放擲ツときたまへ。ヘレナさんの事は言はないでおいて貰は
う。肩なんか持つことはならんよ。些少とでも色男ぶつたりすると承知
しないぞ。

ライサ もう女が止めないから、さ、従いて来い、勇氣があるなら。 汝か、予かどつちにヘレナに對する實權があるか、試験しよう。

デメト 従いて来い？ いゝや、並んで行かう、くつつきあつて。

ライサンダーとデメトリヤスト、ぶつつかるやうに並んで、一しよに入らる。

ハーミ 貴女、此騒ぎは悉皆貴女の故よ。……いゝえ、逃げなくつたつて可いわ。

ヘレナ 何をなさるか知れないもの、それに最早わたし貴女のやうな口の悪い人とは一しよにゐたくありません。手は貴女の方が争闘早いけれど、逃げるには妾の脚の方が長いから速いわ。

ヘレナ 逃げて入る。

ハーミ 駭いた。 呆れツちまつた。

ハーミヤも入る。

オベロン 木蔭から出る。 バックも出る。

オベロ (バックに) これは汝の不注意から起つたことだ。 汝は始終何か間違をしなけりや何か悪戯をする。

バック 全くその間違たのです。 アセスス人の服を被てゐる男だとおつしやつたでせう？ だから全然間違つたのぢやないんです、アセスス人の目へ塗附けたにや違ひないんだから。……此争論は、よツほど面白くなりさうだから、俺ア嬉しくつてたまらないや。

オベロ 今聞いてゐた通り、あの二人の男は、決闘する場所を捜してゐるんだ、ロビンよ、汝往つて暗の夜にしツちまへ。 星の出でゐる空を、地獄のアケロン河のやうな眞黒な深霧で掩つてしまつて、あの睚み合つてゐる二人を、どうしても邂逅ふことが出来ないやうに、路に迷はせる。 まづライサンダーの假聲を使つてさんぐにデメトリヤスを悪口しておいて、次回はデメトリ

ヤスの聲でライサンダーを怒らせて、引廻し、さうして双方を隔たらせてしまふやうにしろ。其中には彼奴らの臉の上へ、死んでるのかと思ふやうな深い眠が鉛の脚を運び、蝙蝠然たる翼を擴げて忍び寄つて來よう。其時此草をライサンダーの目の中へ絞り込むんだ。此液には強い効能があつて、目の迷ひを悉く除き去つて、平生の通りに物を見させるやうにする。で、彼等が其次に目を覺すと、總て此阿呆騒ぎが夢のやうにも空な幻影のやうにも思はれるだらう。さうして彼等は死も尚絶ち得ない莫逆の契りを締んで、アセンスへ歸つて行くであらう。汝に此事をさせておく間に、予は女王の處へ往つて、あの印度童を譲らせて、それから呪ひを釋いて、彼女の目を化物から放免しよう。さうすれば何もかもめでたしくくだ。

王さま、こりや急いでしなけりやなりませんよ。何故なら、夜の神の龍の車が、すん／＼雲を突切りますから。あれ、もう曙神さんの先驅が光りは

バック

じめてゐます。彼れがやつて來ると、あつちこつちを彷徨いてゐた幽霊どもが、ぞろ／＼と墓の方へ歸つて行きます。十字路や海河へ埋葬された罰當り共の精霊も、もう疾うに其蛆蟲だらけの寢床の中へ歸りました。奴等は恥かしい姿態を見られまい爲に、わざつと日光を避けて、永久に黒ツ面の夜とばかり交つてゐますア。

オベロ

ところが吾等は、それとは類の異つた精霊なのだ。予は朝の神の戀人と度遊んだこともある。さうして森林の中を、林務官のやうに、東の天門が全然火のやうに眞紅に押開かれて、綺麗な、有りがたい日光が大海原の上を照して、其緑色の潮流を黄金色に變らせる時刻までも、歩いてゐることが出来る。……けれども、今夜は急げ。ぐづ／＼してゐるな。明けない間に尙行れさうだ。

オベロン 入る。

バック 彼方へ此方へ呼んでくりよ。

此方や彼方へ誘き出せ。

市でも怖りや野中でも、

怖いが名代の、おい、茶目公、

さア〜奴らを誘き出せ。

あそこへ一人来た。

ライサンダー 拔剣を携へて出て来る。此うちに四方眞黒闇になりて文目も分かね體。

ライサ やい、デメトリヤス、何處にゐるんだ？ やい、返辭をしろ。

バック (假聲にて) こゝにゐらい、野郎。ちやんと抜いて待つてら。汝は何處に

るんだ？

ライサ 今直に往くぞ。

バック ちや、従いて来い、もつと足場の

好い處へ。

聲を尾つてライサンダー入る。

と反對の方角からデメト

リヤス、これも抜いた剣を

提げて出て来る。

デメト やい、ライサンダー！ 返辭をし

ろ、逃げたな、臆病者め、逃げやが

つたな？ 物を言へ！ 何處か

の藪の中にあるのか？ 何處へ

頭を隠したんだ？



バツク (假聲にて) やい、臆病者、汝は星に對つて高言を吐いてるのか？ これから大戦を行ふんだと藪に話をしてゐるのか？ それでゐて來得ないのだな？

さア來て見ろ、弱蟲。 やい、嬰兒。 鉄棒で撲り附けてやらう。 汝のやうな奴に劍を抜くのは手の汚れた。

デメト 可し、うぬ、其處にゐるな？

バツク 俺の聲に尾いて來い。 如是處ぢや勝負したくない。

デメトリヤス 聲を尾つて入る。

と反對の方角からライサンダー又出て來る。

ライサ 前へ行つては、絶えず喧嘩を吹掛けて、聲のする處へ行くと、去ツちまふ。 奴め、脚が予よりもスツと速い。 足早に追掛けたんだけど、追附くことが出來ない。 いつの間にか如是眞闇な凸凹路へ來てしまつた。 まアこゝで一休みしよう。……さ、さ、晝よ、やつて來てくれ！ (横になりて) 汝がつい

一寸白みかけてさへくれりや、忽ちデメトリヤスめを見附けて此侮辱の返報をすることが出来るから。

ライサンダー 眠る。

バツク 又出る。 其後からデメトリヤスも又出る。

バツク ほ、ほ、ほ！ ほ、ほ、ほ！ 臆病者、何故來ないのだ？

デメト 待て、勇氣があるなら。 汝は始終居どこを變へて、前へくと逃げて行くばかりで、待つてゐないぢやないか？ 予と面を合はせ得ないぢやないか？ 今何處にゐる？

バツク こゝへ來い。 こゝにゐらア。

デメト ぢや、汝は予を弄つてゐるんだな。 覺えてる、今に夜が明けると酷い目に合せてやるから。 さ、勝手にしろ。 疲勞れて、眠くてたまらないから、暫く此冷い寢床へ横にならう。 明けると行ツつけるから、然う思つてろ。

デメトリヤス 横になつて眠る。
此途端にヘレナ又出て来る。

ヘレナ あゝ、退屈な、長ツたらしい、飽々する可厭な夜！ 夜よ、もツと時間
を縮めてくれ！ 心を慰める朝日よ、出てくれ、明るくなりさへすりや、つれ
ない、酷い、あの人たちに別れて、わたしアセンスへ歸られるから。それか
ら眠よ、悲みの目を閉ぢてくれる眠よ、ちつとの間そツと妾を妾でない處
で伴れてツとくれ。

ヘレナも横になりて眠る。

バツク

まだ三人だなり？ もう一人来いよ。

男も二人で、女も二人だ。

そりやこそ来たぞよあの女が、

ふり／＼怒つて澁面作つて。

戀の神めは悪戯者だな、
可愛さうに女を氣狂ひにすら
ア。

ハーミヤ 又出て来る。

ハーミ
くたびれもしたし、情なくもある
し、露にやびしよ濡になるし、茨
にや引搔れるし、ほんとにもう這
ふことも歩くことも出来やしな
い。歩かうと思つたつて脚がい
ふことを聞きやアしない。こゝ
で夜明まで休んでおよう。…神
さま、どうぞライサンダーをお



護り下さいまし、決闘をしますやうなら!

ハーミヤも横になつて眠る。

バック

この地上で

よく眠ろよ。

塗つてやるぞよ

目の薬、

好男子。

と言ひながらライサンダーの目へ草の液を絞りかける。

此次醒めると、

舊の女が

綺麗に見える。

それが正當だよ。

そこでおぬしが目を開くと、

めいゝ各自に己がのを

取るちふ下世話の式通り、

太郎はお松を伴れて行く、

一切萬端故障なし。

牡馬が牝馬を取戻しや、萬事めでたしくだ。

バック 踊るやうにして入る。

四人は尙よく眠てぬる。

* * * * *

第四幕

第一場 同じ森林。

ライサンダー、デメトリヤス、ヘレナ及びハーミヤ尙眠てゐる。
チテーニヤとポトムと出て来る。豆の花、蜘蛛の巣、蛾、芥子の種及び他の小妖精ら侍してゐる。オペロン後れて出て、隠形の體にて、脊後の一隅に立つてゐる。

チテー さアさ、此花床へお掛けなさいね、さうだとわたしお前さんの其好いたらしい頬を撫で、あげたり、其滑々したお頭に麝香薔薇を刺してあげたり、

其大きな耳を接吻してあげたりするわ、嬉しい、好きな人。

畫面の通り、もたれかゝりてしなだれる。

ポトム 豆の花はゐるだかね？

豆の花 はい。

ポトム 豆の花さん、頭搔いてくんなさい。蜘蛛の巣さんゐるだかね？

蜘蛛 はい。

ポトム や、蜘蛛の巣さん、どうかお前さま、武器持つてつて、薔の素頂點に止まつてゐる赤ツ尻の蜜蜂イ殺して来てくんなせえまし。さうして、奴の蜜囊を取つて来てくんなせえまし。お前さま、あんまり威勢よく跳廻らつしやるといけましねえだよ。蜜囊を破かねえやうに氣イ附けさつせえまし。蜜が囊から打溢れて、もしかお前さまが押潰されちや大變事だからね。…芥子ツ種さんはゐるだかね？

芥子 はい。

ポトム 芥子ッ種さん、手エ貸してくんなせえまし。どうかねえ、もうその、禮儀てえことア止してくんなせえまし。

芥子 御用は何です？

ポトム 唯ね、蜘蛛の巣さん手傳つて、わしの頭搔いてくんなせえまし。わし理髪師へ往かにやアなりましねえだよ。面のまはりが怖しく毛むくじやらになつてるやうだからね。俺つい一寸うぬが毛に觸られても、搔かねえちやゐられねえ位感じッ早い驢馬だからね。

チテー え、お前さん、ねえ、可愛い人、何か音楽をやらせませうかねえ？

ポトム わし音楽にや中々善い耳有つてるだよ。鐵火箸と曝れッ骨が可いだよ。

チテー で無きや…ねえ、可愛い人、何か喰べたか無くつて？

ポトム 食ひてえね、秣を五升ばかり。上等燕麥の乾した奴なら、俺もりくとや



らかさアね。 枯草の大束てのを食つて見てえやうだねえ。 枯草の上等と
来ちや、旨い奴と来ちや、類なしだからね。

チテ一 わたしの許には大膽な妖精が頭あるから、其奴が栗鼠の蓄込んでるもの
を探して、今に、一等新しい栗の實か何か取つて来てあげるだらうよ。

ボトム わしそれよりか乾豆を二掴みばかり欲しい思ふだよ。 けれど、最早どうか、
只そつとしておいて貰ひてえもんだねえ、わし眠くなつて来たから。

チテ一 ちや、お眠、わたしお前さんを両手で抱擁してあげるから……お前た
ちは彼方へ往つて、めいくの仕事を……

妖精ら皆入る。

チテ一ニヤ 文句の通りボトムに纏ひ附くやうに凭れて、

ま、如是風に晝貌と美しい忍冬とが温雅く絡み合ふのよ、ま、如是風に楡の
木の皮だつた枝へ女蔦の蔓が纏綿るのよ。 あゝ、真個に可愛いことね！

真個にわたし惚々するわ！

チテ一ニヤもボトムも眠る。

此途端にバツク出る。 オペロンも前へ進む。

オペロ

(バツクに)ロビンや、好いところへ来た。 此旨い様子を見な。 あんまりの惚

け方だから、惘然になつて来た。 予は、つい此間、森の彼方で、彼女が此可

厭な阿呆めの爲に戀の記念の草花を捜してゐるのに逢つたから、さんぐ

に毒づいて、喧嘩をした。 彼女は其時新鮮な香の好い花で以て冠を製へて、

あの阿呆の頭に被せてゐたのだ。 あの、蕾の上へ、光り輝く真珠のやうに、

ふつくらと載かるのが例の露の王が、其花冠の小ちやな花どもの美しい

眼の裡に涙然として溜つてゐた、侮辱されたのを歎いてゐるかのやうに。

予がさんぐツばら嘲弄すると、彼女は温順やかに、堪へてくれと言つた、
で予は例の取換兒を興れろと言つた、と直に承諾して、妖精らに吩咐けて、

あの童を妖精國の子の亭まで届けてよこした。あの童が手に入つた上は、此可厭しい目の惑ひを除却つてやらうと思ふ。だから、バックや、此アセンスの田夫の頭から、面變りをさせた此假頭を取つてやれ、奴も目が醒めたなら、他の輩と一しよにアセンスへ戻つて行かれるやうに、さうして今夜の出來事を只一場の苦しい騒がしい夢であつたとばかり思ふやうに。が、まづ女王から釋いてやらう。(と草でチテーニヤの兩眼を撫でつゝ)

常の如くにあれ、

常の如くに見よ、

キュービッド草の戀の毒も

月神草の蕾に如かず、

此花の效力に如かず。

さアさ、チテーニヤ、さ、起きなよ、起きなよ。

チテーニヤ目を覺す。

チテー おや、オベロンさん！ わたしまア何て夢を見てゐたらう！ わたし驢馬

オベロ に惚れてるやうに思つてゐたのよ。

オベロ お前の情人は其處に臥てゐるよ。

チテー どうして如是事が起つたんだらう？ (はじめてポトムに目を附けて) おゝ、ま、厭

らしい！ もうく見るのも厭だ！

オベロ しづかに、暫時……ロビンや、其頭を取ツちまへ。……チテーニヤ、樂隊を

お呼びよ、さうして此五人の者を並の眠よりもずつと深く熟睡らせてしま

はう。

チテー おい、音樂をお始め！ よく眠入らせる音樂を。

バック

さアさ、汝目が覺めたら、(ポトムの頭から驢馬の頭を取除けながら) 生れ附の馬鹿眼

で覗いて見ろ。

オベロ さア、音楽を！ さア〜、女王よ、予と手をお組みよ、さうして踊り回つて此奴らの眠てる地面を揺つてやらう。もう全然仲直りをしたから、明日の晩はシ、ヤス公の館へ往つて、めでたく盛んに嚴肅に踊つて、子々孫々までの繁榮を祝福してやらうよ。シ、ヤスと一しよに、此眞實な戀人連の二組も、めでたく式を擧げることになるのだ。

音楽につれて一同浮れ立つ。

バック

妖精の王さん、お聴きなさい。

朝の雲雀ツ子が聞えます。

オベロ

それぢやア黙つて、眞面目になつて、夜の影を追うてびよい〜走らう。ぶら〜してゐるお月よりや早く

チテー

吾徒は地球を廻ることが出来る。

さア〜、貴郎や、飛んで行く途中で、

今夜の始末を話して頂戴。

どうしてわたしが人間と一しよに、

此處の地上に眠込んでゐたのか。

バック、オベロン、チテーニヤ、踊るやうにして入つてしまふ。

と、奥で獵の喇叭の聲。

やびてアセンスの君シ、ヤス、其妃となる筈のヒボリタ者臣イ！

ヤス、及び従者ら出て来る。

シ、ヤ やい、だれか往つて林獵係の者を捜して來い、五月祭の式は最早済んだから。幸ひ太陽も昇りかけてゐるから、ヒボリタどのに予の獵犬どもの妙音樂を聞かせることにしよう。西の谷間で犬どもを放せ。さ、急いで林獵

係を捜して来い。……

一侍者入る。

妃よ、さアこれから山の頂邊へ登つて、犬の聲と其反響とが混淆になつた音楽といふ奴を聞くことにしよう。

ヒボリ

わたしは、ハーキュリスどのやカドマスどのと交際つてゐました時分に、あの人達が、クリートの森で、スバルタの獵犬を使つて野猪を死地へ追詰めたのを見ましたッけが、あんな勇ましい叫び聲は曾ぞ聞いたことがありませんでした。森も山も空も、近邊の何處も彼處もが、みんな一しよくたになつて反響しました。わたしやあんな音楽のやうな騒音を、あんな心持の好い雷鳴を曾ぞ聞いたことはありませんでした。

シヤ

予の獵犬は、彼の砂色をした、髯の大きいスバルタ種を育てたのだ。奴等の頭には朝露を掃ふ程に長い耳が垂れてゐて、膝曲りで、さうしてセッサリの野牛のやうに喉肉が弛んでゐる。追脚は緩いが、叫聲は全然各種の鈴のやうに、次第に節調を成してゐる。さういふ音楽を奏する獵犬の群を、脊子や獵笛で使役した例は、クリートにもスバルタにもセッサリにもなかつたことだ。ま、聞いて見て、判断をなさい。……

ふと眠れるハーミヤに目を附けて

が、一寸待つたり。この女神のやうなのは何だ？

イーシヤスをはじめ皆々眠れる四人に目をとゞめる。

イーシ

御前、こゝに眠てをりまするは私の女めにござります。それからこれはラインサンダーで、これはデメトリヤスでござります。これはヘレナ、老ネダ一の女のヘレナでござります。どうして此處に、一しよに眠てをりまするら。

シヤ

必定五月祭をするといふので早く起きたのであらうが、わしらの意向を聞

いて、それを祝賀しようと思つて此處へ來たのでもあらう。が、イージャス、たしか今日は、ハーミヤに、何れとも決定の返辭をさせる筈の日にちやアないか？

イージ さやうでござります。

シ、ヤ おい、獵師どもに吩咐けて、喇叭で彼等を起させろ。

奥で喇叭を吹鳴らす。関の聲が起る。

デメトリヤス、ライナンダー、ハーミヤ及びヘレナ、おのゝく目を覺し、驚きて起上る。

シ、ヤ (戯談口調で) はい、お早う。ヴレンタインさんの祭日は既う過んだのに、森の

小鳥たちは今頃やツと交尾ひはじめるのか？

ライサ 眞平御免下さい。(と一同膝まづきて禮をする)。

シ、ヤ どうか一同起つてくれ。…君たち二人は競争者で敵同志である筈なのに、

ライサ どうして如是に仲好くしてゐるのだ、憎み合つてゐる者が、並んで眠りながら、互ひに害心があらうとも恐れもせず疑ひもしない程に？

御前、私は、半分は夢中、半分は現といったやうな狼狽へた御返辭を申し上げます。ですが、只今の處では、實際どうして此處へ参りましたのだから、たしかには申されません。が、たしか…事實を申上げようと存じますが、多分斯うだらうと存じますが…私はハーミヤと一しよに此處へ参りましたのです。私共の意志は、アセンスを駆落して、國法の咎めの及ばない處へ往つて…

イージ 澤山、澤山。御前、もう後をお聴になるには及びません。彼れが頭上に國法をお下しになることを願ひます。…デメトリヤス、あいつらは窃と駆落しようとしたのだ、さうして吾等に鼻明させようとしたのだ、お前さんは妻を奪られ、わしは許諾權を蹂躪される處だつた。

デメト

御前私は二人が駈落したといふ事をヘレンどのから聞きまして、憤激して此處まで追掛けました、ヘレンどのはまた戀ゆるに私の後を追つて参りました。ところが、御前、どうしてだか解りませんが、…何か人間以上の力の故だと存じますが、…ハーミヤを戀しいと思ふ心が、雪の溶けるやうに消えてしまひました、今では、まるで、子供の時分に大切にしておいた無價値玩具か何かの記憶のやうにしか思はれません。唯今では、眞實、有難いとも尊いとも美しいとも懐しいとも思つてゐますのは、唯ヘレンばかりでございます。彼女とは、御前、ハーミヤに逢ひました前には、許嫁の仲であつたのでございます。ところが、病氣の時のやうに、私は美味を嫌がりました、が、今は健康を復しましたので、自然の味覺に戻りました。今では、彼女が欲しくもあり、愛らしくもあり、懐しくもなりまして、もう決して終生渝るまいと存じます。

シ・ヤ

戀人たち、お前がたは運よく好い處で逢つたといふものだ。くはしい話は又後で聴かう。…イージャス、予は君の意志を制肘しますよ、と言ふのはわしは此二組の者に、神殿に於て、わしらと一しよに永久の契りを結ばせようと思ふからだ。そこで、もう大分午前も時間が経つたやうだから、思ひ立ちましたもの、獵は中止にしよう。…さア、みんな一しよにアセスへ歸つたり〜！ 男三人、女三人で、盛な祝宴を催さう。…さ、セボリタ。

シ・ヤス、セボリタ、イージャス、及び従者ら入る。

デメト

今までの事が急に小さくなつて、何が何だか見分けられないやうになつた、遠山が霞んで雲となつた時のやうに。

ハーミ

ヘレナ

何だか目に焦點がなくなつたやうだわ、何もかも二つに見える。わたしも然うよ。デメトリヤスさんといふ寶石を拾つたけれど、拾つたんだから、わたしの、やうでもあるし、さうでないやうでもあるし。

デメト 實際わたしは目が覺めてゐるんだらうか？ わたしにやまだ何だか、眠
てゐて夢を見てゐるやうに思はれる。貴女は、こゝに公爵さんが來てゐて、從
いて來いと言つたと思ひますか？

ハミ 然、さうです。それから父も來てゐました。

ヘレナ それからヒポリタさまも。

ライサ それから公爵は神殿へ從いて來いといはれたのです。

デメト ちや確に覺めてゐるのだ。公爵さんに從いて行きませう さうして途々夢
を話し合ひませう。

一同入る。

ポトム 目を覺す。

ポトム 予のきつかけになつたら呼ばつてくん、返辭すべいから。予のきつ
かけや、あゝ、うつくしきピラマスどのだせ。……おや〜！ ビーター・クイ

ンスさん！ 風櫃屋のフルートさん！ 鍛冶屋のスナウトさん！ スター
ゼリングさん！ おや〜、窃と逃げたね、予に眠こかしを喰はせて、予滅
法界もねえ不思議な夢エ見た。予人間の智慧ちや何ともいふことの出
來ねえやうな夢エ見た。如是夢の説明しべい思ふ奴がありやア大驢馬
だア。何でもその予が……逆もこりや誰れにだつて、如何いふんだか言へ
るもんぢやアねえ。何でもその、予が思つたにやア、何を、その何してゐち
ふと……が、逆も人間で分るもんぢやアねえ、予がその何を何してゐたか、
それ言はうとするやうなら、大馬鹿だ。予の夢ア曾そまだ人間の眼で以て
聞いたこともなければ、耳で以て見たことも、手で以て味つたことも、舌で
以て考へたことも、心で以て言ひ傳へたこともねえ夢だに。予ビーター・ク
インスさんに頼んで、此夢を歌に作つて貰ふべい。外題はポトムの夢と附
けべい、何故ツて、まるツきし底が脱けてゐるだからよ。さうして予其歌を、

劇の最終に、公爵さんの前で歌つてくれべい。事によると、ぐツと面白く
しる爲に、死んでから歌ふべいかな。

ボトム 入る。

第二場 アセンス市。クインスの宅。

クインス、フルート、スナツト及びスターゼリング 出て来る。

クイン ボトムさんの家へ人を遣つて見たかかね？ まだ歸らねえだかね？
スター 何の便りもねえだよ。キツと攪れてしまつたかね。
フルー あの人が来ねえけりや劇は駄目の皮だね。止だんべいり。
クイン 出来なかつべい。あの人の外にやア、ピラマスの役やつてのける者アセン

ス全市に一人もねえだからね。
フルー 無えだよ。あの人はアセンス全市で全く第一等の細工人だからね。
クイン さうだよ、それに最も好男子だからね。それから聲の美しいのちや町内の者
の美観だアね。
フルー 美観ぢやアねえよ、鑑鑑いふだよ。美観だなんて、あんまり勿體ねえ、あり
やお前、くだらねえものこんだに。

スナツケ 出る。

スナツ 皆の衆、公爵さまは今神殿の方からござらつしやるところだ。何でも他に
二三人の檀那衆と嬢さんたちが結婚さつしやるさうだ。吾徒のする事が
首尾よくお慰みになりやア、みんな立身が出来るだがねえ。
フルー あゝ、氣の毒なボトムの親方！ 一日六ペンニーは外れツこは無かつたに。もし
を損しツちまつたに。一日六ペンニーは外れツこは無かつたに。もし

公爵さまが、ピラマスやらせて六ペンニーあの人にくれさつしやらねえや
うなら、予絞罪にされるだア。それ位の値打はあるだよ。ピラマスで一
日六ペンニー取れねえけりや、一文だつても取れねえや。

ボトム出る。

ボトム 若い衆たちは何處にゐるだね？ 達衆たちは何處にゐるだね？

クイン ボトムさん！ はれ、ま、何て嬉しいこんだ！ 何てまア勇快なこんだ！

ボトム 皆の衆、俺不思議なこと話さんけりやなんねえだよ。が、訊いちやいけね
えよ。何故ツて、これ話すやうだと、俺眞當なアセンス人でねえだからね。

今に何もかも話すべいよ、そつくら其儘。

クイン ねえ、ボトムさん、聞かせとくんなせえよ。

ボトム うんにや、いふめえよ。俺が話さうてことは、公爵さまが今恰ど夕飯をす
まさしやつたちふことだけだ。さア、衣裳イ寄集めて、鬚にや丈夫な

紐オ附けて、靴にやア新らしいリボ
ン附けて、直にお館へ集るだ。めい
く自分の役割を忘れねえやうにね。
つまりその何だ、吾徒の劇がお採用
になつたんだよ。どうしたつてシス
ピにやア清潔な麻布を被せにやなん
ねえよ。それから獅子の役する者ア
爪エけづらねえが可い、獅子の爪ア
長く垂れ下つてゐねえけりやなんね
えだから。それから、我等が大切の
俳優さんたち、葱や大蒜を食つちやア
いけねえよ、美しい聲しねえけりやな



る。で、或は大地獄にも入りきらん程の夥多しい悪魔が出て来たなぞといふ、それが狂人である。情人とても、其物狂はしきは全く同様で、黒人女の面上にすらもヘレンの美を見るのである。若夫一種微妙な想ひに驅られて、狂ほしく廻轉する詩人の眼は、今天を見るかとするれば地を見、地を見るかとするれば天を見る。而うして想像が、未だ曾て世に知られざる事物の形を具化體するに随つて、詩人の筆はそれに定形あらしめ、空然として虚なる物に居處を興へ、名を興ふ。強い想像には種々の小手先藝がある、例へば、若し偶と何か喜ばしい事を思ひ附くことがあると、もう既にそれが成立つてゐるやうに思ふ。若しくは夜中なぞに、多少怖しいと想像するや否や、忽ち叢をも熊と思ふ。

ヒポリ

ですが、昨夜聞いた話の模様といひ、四人ながら同じやうに心が變つたことゝいひ、神経作用とばかりは思はれません、何か確實な理由のあること

らしく思はれます。併し、それにしても、奇怪至極なことです。

シ、ヤ

あ、あそこへ戀人どもが浮かれ喜んでやつて来た……

ライサンター、デメトリヤス、ハーミヤ及びヘレナ出る。

や、めでたう〜！ 若々しい喜びが永久も〜 お前たちの心に伴ふやうに！

ライサ

兩殿下の御歩みに、御食卓に、御臥床にこそそれに彌優りまするお喜びの伴ひますやうに！

シ、ヤ

さア〜、後晩食と就褥と間の此長い三時間を何をして過さうぞ 假面劇か、踊か？ 餘興係の者は何處にゐる？ どういふ慰みを準備してゐる？

退屈を紛す何か好い遊戯はないか？ フィロストレートを呼べ。

フィロ

へい、こゝに居ります。

シ、ヤ

おい、どんな慰みを準備してゐる、今夜？ どんな假面劇がある？ どんな

音楽がある？ 何か面白いことでもなければ、此緩徐い時間の紛しやうがあるまいぞ。

フィロ こゝに種々準備いたしておきましたお慰みの筋書がございます。此中でお氣に召しましたのを先づ御覽にいれませう。

書面を渡す。

シ、ヤ

(讀む)。半人半獸族との戦闘。堅琴に合せてアセンスの閨宦之を歌ふ。……これは止さうよ。此歌は、もう彼女に話してしまつた、予の親戚のハーキュリスの功績話をするとて。……(又讀む)。酒神祭の爛醉せる氏子ら憤激の餘りスレーヌ國の歌人オルフュースを八裂に爲す暴擧の場。……こりや陳い趣向だ。予が先だつてシーブスから凱旋した時にも演つて見せたよ。……(又讀む)。文藝を司りたまふ九柱の女神たちが、先頃乞食の境涯に零落して逝れる博學者の死を歎きたまふ事。……こりや何か諷刺の作だな、大分皮肉

な。婚禮の餘興にはふさはしくない。……(又讀む)。若きピラマスと其戀女シスピとの冗漫にして簡短なる一場、極めて悲惨なる大滑稽。……悲惨で滑稽だ！ 冗漫で簡短だ！ といふのは熱い氷、眞黒な雪といふやうなものだ。え、此不調和を如何して調和させることが出来る？

フィロ

御前、それは斯様でございます。脚本としては類のないほど簡短でございしますが、やゝ十語ばかり贅がございしますので、其十語だけ冗漫なのでございします。と申すのは、其劇の白は一言だつて整つたのはございませぬ、又一役だつて役らしいのはないからでございます。さうして全く悲惨な劇でございします、と申すのは、ピラマスが其場で自殺するからでございします。

此作を稽古致すのを見ました時、私は實際落涙に及びました。併しあの位大笑をして可笑涙にくれたことはございませぬ。

シ、ヤ

だれがそれを演ずるのだ？

フィロ

平素は荒仕事ばかり致してをりまするアセンスの職人共でございます。今日までは精神上の努力を試みたことはないのでございますが、御慶事の餘興にとて、右の劇を大骨折で不慣ながら暗誦中にごさいます。

シ・ヤ

ぢや、それを見よう。

フィロ

いや、御前、それはお止め遊ばせ。わたくし一見致しましたが、つまらん、たはいもないものでございます。御覽に供しようために、一生懸命に、惘然な程の苦心を致して暗誦してをります、彼等の志だけが、たかゞお慰みになります位のもので。

シ・ヤ

その劇を見ようよ。卒直な忠實な心が呈供してくれるものなら、どんな物でも結構だ。さア、そいつらを伴れて来てくれ。婦人たち、一同座にお著きなさい。

フィロスリート入る。

ヒボリ

わたしは重荷に堪へかねてゐる惘然や奉公疲れで死にかゝつてゐる義務なんかを見ることは好きません。

シ・ヤ

何の、そんな物を見なさる氣遣はないよ。

ヒボリ

でも只今係の者が、彼等は、斯道の事は、何にも爲得ない者だと言ひました。何にも爲得ないのを面白がつて見てやるのが、斯道の通人といふものだ。

シ・ヤ

誤錯だらけを買つてやるのが慰みになる。卒直な忠實な奴が下手々々とやることを、寛仁大度は、其出来榮を買はないで、努力を買ふ。予が臨御した或處で、曾て學者達が豫め準備しておいて歓迎の辭を演べようとしたツけが、予を見ると、彼等は皆慄えて、蒼白になつて、文句の途中で行詰るやら、多年言ひ慣れてゐる筈の發音を畏怖の餘りに言ひかねるやら、つまり黙々で中止して歓迎の辭を言はずに了つたことがある。ねえ、實際予は其無言中から歓迎の意を酌取つたよ、其臆病な、遠慮勝な務振の中に、無禮な、厚顔

しい多辯や早口に劣らないだけの誠志を讀むことが出來た。だから、眞情があつてさうして正直であれば、言は極めて少くとも、極めて多く語るものだと予は思ふ。

フィロスリート 又出る。

フィロ 恐れながら、開場詞をお聴に入れます。

シ、ヤ ずつと進ませろ。

奥で喇叭を吹立てる。

クインス 開場詞役として出る。

開場詞

或ハ尊意ヲ損ズベケンガ、願ハクハ思惟セラル、勿レ。是レ吾等ニ惡意アリテ然ルナリ。トカク拙劣ナル技ヲ高覽ニ供セントスル他ナシ。忠勤ノ爲ノミ然レバ乞フ尊察ヲ賜ヘ馬ゾ惡意ヲ以テ來リ演ゼンヤ。吾等ノ眞願ハ一ニ是レ。餘興ノ呈進ナリ兼テハ大愉快ナリ。如何ゾ閣下

等ヲシテ失望セシメン俳優等ハ參著シ居レリ。彼等ガ何ヲ演ゼントスルカラ乞フ。其顔見セニヨリテ知ラレヨ。

句讀に關はず、べんけい、がなぎ、なた流に演るので、意味が處處反對になる。

シ、ヤ 彼奴め句讀に關はず演つてゐる。

ライサ 彼奴は開場詞を全然野馬でも乗廻すやうにして、無暗に走らせますのです。

法も術も知りません。これは善い訓誡でございます、之を言ふ、未し、正しく言ふ、初めて可なりです。

ヒボリ ほんとは、今の口上の言ひかたは、子供が笛を吹くのに似てゐました。律呂を調へることをば知らないで、唯もう聲ばかり出してゐましたわね。

シ、ヤ いはい、糾紛つた鎖だ、損じてはゐないが、めちやくになつてゐる。此次は何が出て來るか？

眞先に紹介役の者刺叭を持って出て来る。(或は此役をク
インスに兼さす例もあり。) つゞいてピラマスとシスピ、石牆
役と月役と獅子役とが出る。

紹介役

え、お檀那さまがたには、これなる顔見せを御覽なされて、定めし不
思議に思召されませうが、今にお明白に相成ります。まづ、此男はピラ
マスどのにござります、此別品さんはシスピどのにござります。此、石灰
と粗漆喰で塗立てました男は、戀人衆を隔てます無情しい石牆にござり
ます、そこで二人の衆は、やつと石牆の隙間から内密話をして満足してを
られます。これア、如是に見えましても、石牆でござります。此、提灯と
茨の束とを持って犬を伴れてをります男は月の役を勤めます。右の
二人の衆は、月の晩に、場處もありませうすに、ニナス殿の墓穴の傍で出會
をして思ひのたけを口説いたでござります。すると、此可怖い獅子ちふ獸

類が、夜中に先へ來られましたシスピどのを威嚇しましたと申さうか、脅
しましたと申しませうか、で駭いて逃げられます其途端に、外套を落さ
れます、それを獅子が血だらけの口で引くはへて汚します。程なく立
派なお若衆のピラマスどのが見えられます、血に染みたシスピどのは、外套
を拾はれます、それを見て無念がつて、無慚にも胸元を、物の見事に刺貫き、
むざ／＼空しうなられます。と此時まで桑の木蔭に待つてをられまし
たシスピどのも、忽ち短刀で死なれます。尙申し洩しました事共は、獅
子なり、月なり、石牆なり、二人の衆なりが、これに罷り在ります間に、たつ
ぷり申し上げるでござります。

石牆役だけを殘して皆と入る。

シヤ

獅子が物をいふか知らん。

デメト

不思議はございません。獅子も随分物を申しませう、驢馬が幾らも口を利

く時勢でござりますから。

石 牆 え、此お劇では、てまへはスナウトと申しますが、石牆の役を相勤めま
することに成つたのでござります。で、御承知おきをお願い申しますが、
その石牆に裂け目だか隙間だか、ござりまして、そこから戀人のピラマス
どのとシスビどのが密々と内密話をせられます。此壤土と此粗漆喰
と此石とで私が其石牆だてことが分ります、といふ譯でござります。それ
からこれが其裂目で、右と左の、この裂目から戀人衆がこはく、内密話を
するのでござります。

シ、ヤ 石灰や毛髪が演る白としては此上はあるまい。

デメト 壁が物言ふとは申しますが、如是洒落れたのは初めて聞きました。

シ、ヤ ピラマスが石牆の傍へやつて来た。黙つて！

ピラマス 又出て来る。

ピラス

「あ、物怖しき夜よ！ あ、いとも黒き色したる夜よ！ あ、晝の在
らぬ折には、必ず在る夜よ！ あ、夜よ！ あ、夜よ！ あら情なや、情
なや、もしやシスビどのが約束をば忘れられたのではないか知らぬ！
さて、おぬしよ、あ、石牆よ、あ、なつかしい石牆よ、戀人の父ぢやの地
面と我等の地面との中を隔つる石牆よ！ 石牆よ、あ、懐しい石牆よ、
嗚、裂目をば我等に見せて、此眼で覗かせてくれよ嗚……」

石牆 役指を三本出して見せる。

かたじけない、深切な石牆よ。 あ、何卒ジョーヴ神の、此功德をめでさ
せられて、おぬしをば御保護遊ばさるゝやう！ …… (指の間を覗きて) が、何
が見えるかな？ シスビどのが、影さへも見えぬわ。 え、己れ、非道無
慚の石牆め、幾ら覗いても些も嬉しい目に逢ふことは出来ぬ。 石牆の罰
當りめ、己れ、予を欺しをつたな！」

シ・ヤ あの石塙は生きてゐるんだから、黙つちやゐまい、彼方からも「罰當りめ」と言ひ返しさうだ喩。

ピラマ (シ・ヤスに) うんね、そんなことア言ひましねえだよ。「手を欺しをつたな」てのがシスビのきつかけだからね。これから彼女の出になりますだ、さうして予がそれを石塙の穴から目附けることになりました。見て見てござらつしやい、予が言つた通りになるだから。…あれ、あそこへ來た。

シスビ又出る。

シスビ 「あゝ石塙よ、おのしは幾たび聞きやつたるぞ、ピラマスどのと、妾とおのしが無情う隔ちやるを泣きうめく妾の聲音を！ 妾の此櫻實の唇は、何度おのしの此石に接吻せしやら、石灰と毛髪で固め止めた此石に。」

ピラマ 「あゝ聲が見ゆる。どれ、裂目へ往つて、シスビどの、顔が聞ゆるか見て見ようす。…(指の間から覗きつゝ) シスビどのよ！」

シスビ (これも指の間から覗きて) 「戀人ぢやな、戀人であらうすの？」

ピラマ (尙覗きつゝ) 「どうあらうすとも、吾等は御事の戀人ぢやよ、さうして往昔のライマンダーのやうに眞實でおじやりまするぞ。」

シスビ 「さうして妾はまた彼のヘレン姫のやうに、運の神に殺されませぬ限りは、渝りませぬ。」

ピラマ 「シヤファラスとても彼のプロクラスに吾等ほど眞實ではおじやらなんだであらうぞ。」

シスビ 「シヤファラスとても彼のプロクラスに、妾がお身さまに眞實なほどには。」

ピラマ 「あゝ、此無情い石塙の穴越に、吾等に接吻して下され。」

シスビ 「接吻はしても、石塙の穴に達くばかりで、お身さまの唇には達きませぬ。」

ピラマ 「ネンネエの墓地へこれからすぐ來てはたもりませぬか？」

シスビ 「生きようと死なうと、すぐに參りまする。」

ピラマスとシスビ左右へ別れて入る。

石墻 まづこれで予の石墻の役は済しました。濟んで見れば、石墻は、ま、斯うかたづけれます。

石墻 役も入る。

シ・ヤ これ二人の間の壘壁は破壊されてしまった。

デメト 止むを得ますまい、黙つてゐて立聞をする悪戯者ですから。

ヒボリ 如是馬鹿らしい劇は曾ぞ見たことがありません。

シ・ヤ 凡て斯ういふものは、最ち善いのも影坊師たるに過ぎない。最ち悪いの

でも必しも最ち悪くはない、想像で補ひさへすれば。

ヒボリ その想像は必ず貴下の想像でせう、彼等にはさういふ想像はありさうに見

えませんもの。

シ・ヤ いや、あいつらが自分で想像してゐるだけに想像してやりさへすれば、あ

れで立派な役者で通るよ。……あ、あそこへ立派な獸類が二疋やつて来た人間と獅子だ。

獅子 獅子役と月役と出る。

獅子

御婦人さまがたに申しまする、貴女がたはお優しいから、おそろしく小さいやい騾鼠が床の上爬つてるの見てせへ怖らつしやりますだから、本式の獅子が腹ア立つて、吼え猛つたら、必定恐怖つて、びくついて、慄えさつしやりませう。ならば、お見知りおかつしやりませ、予は指物師のスナグちふもんで、決して可怖い獅子でも、其母獅子でもござりましねえ。予獅子になつて、實際に食ひ合ひに来るやうなら、不幸なこんでござりますだからねえ。

シ・ヤ

大變優しくつて、さうして中々深切な獸類だ。

デメト

わたくしが知つてをりますけどものゝ中で最も抽んでたものでございま

す。

ライサ 此獅子は、勇氣からいふと、たかゞ狐でございませうよ。

シ・ヤ 全く。さうして智慧分別からいふと鷲鳥だらう。

デメト いや、さやうちやございますまい。彼れには己が智慧分別を持出しますだ

けの勇氣もございませぬ。然るに狐は鷲鳥を持出します。

シ・ヤ 況や、彼奴の智慧が彼奴の勇氣を持出し得ないことは言ふまでもなからう。

何故ならば、鷲鳥が狐を持出すといふことは無いこつたから喃。はて、そ

の邊は彼奴の分別に一任しといて、月の言ふことを聴かうよ。

月 此提灯は角の格好をしたお月さんなのでござります。

デメト 彼奴め頭に角を載けて來れば可いのに。

シ・ヤ 彼奴は新月ぢやないよ、だから角は輪の中に隠れてゐるのだ。

月 此提灯は角の格好のお月さんなのでござります。私は月の中の人積り

でござります。

シ・ヤ こりや先刻からの中で一番理窟に合はん。あの男はあの提灯の中へ入つ

てゐなけりやならん譯だ。で無くて、如何して月中の人だ？

デメト あの中へは入り得ないのでございませう。あの通り、蠟燭が中にて、一

心に修羅を燃してをりますから。

ヒホリ わたしや此月には最早倦きました。變つてくれれば可いに！

シ・ヤ 智慧の光の微かな處を見ると、もう程なく傾くのだらう。だが、作法上、是

非とも、最早少し待つてゐてやらねばなるまい。

ライサ (月役に) おい、月、後を言へ。

月 私が申し上げて置きますことは、これだけでござります、え、此提灯はお

月さんで、私が其お月さんの中の人で、此茨の束が、茨の束で、それから此

犬が、犬なのでござります。

デメト さういふ物は一切月の中にあるのだから、提灯の中に入つてゐなけりやな
らない譯だ。……が、しづかに！ シスビがやつて來ました。

シスビ 又出る。

シスビ 「ここがネンネエどの、墓地ぢや。戀人は何處にござるやら？」

獅子 (のろ／＼と進みて) ううう！……

と唸る。シスビ逃げて入る。

デメト よう／＼、獅子、唸り方が巧いぞ。

シ・ヤ シスビよ、逆ッ振が佳いぞ。

ヒボリ 月よ、照ッ振が佳いよ。ほんとにあの月は様子よく照つてますわねえ。

獅子シスビの落して行きたる外套を口にくはへて振廻すこ
とありて入る。

シ・ヤ 獅子よ、嚙裂きッ振が巧いぞ。

ライサ そこで獅子めは入ッちまつた。

デメト するとピラマスがやつて來た。

ピラマス 又出る。

ピラマ 「あゝ愛らしき月よ、かたじけない／＼、太陽のやうな光をば射してくれる。

月よ、かたじけない、今此際に斯う分明に照してくれるとは。おぬしの
此きらくと金のやうに燦めく光で、あの眞實なシスビどの、忍んで來

らるゝのが見えようほどに。 (外套を見つけて) や、これは！ やかなし

や！ や、見よや、不幸な武士よ、何といふ怖しき悲哀ぞや！ 眼よ、ま、

おのし、これを見い！ 何として此様なことが起つたぞ？ あゝ、いと

し懐しい戀人よ！ あゝ悲しや！ 御事の此結構な外套が、や、血汐に

塗れてをるわ！……來れ／＼、怖しき怨靈の神よ！ おゝ宿命よ！ 來

れ／＼。玉の緒を切れ、糸を断て。打殺せ、打碎け、打崩せ、打挫け！」